

伊能忠敬

研究

松平土佐守居城

高知

下知村

長岡郡

佐郡

今良村

葛島

五基山村

吸江村

吸江寺

土佐郡

吾川郡

横濱村

横濱村

横濱村

御堂瀬浦

長濱村

仁井田村

瀬戸内海

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米國議會図書館蔵

伊能大図一五九号部分「土佐 高知」

文化五年（一八〇八）から六年、はじめにかかった第六次（四国・大和路）測量のコースにあたる。

室戸岬を廻って土佐湾岸を東から進んできた。種崎浦に止宿、土佐湾奥からさらに深く湾入する浦戸湾の入口、浦戸向から湾の東岸を北上、五臺山村から湾の最北部介良村に達し、ここから舟で堀川から城下に入る。

五臺山には四国第三一番札所、竹林寺があり、文殊菩薩をまつる。現在、五台山公園は高知市の夜景スポットだというが、日記にも「風景好」とある。山下、海上の吾海亭は国主遊覧の地という（日記）。

城下には七泊、この間、手分けした坂部貞兵衛、柴山傳左衛門らの一隊は北に向かい、土佐・伊豫国境の笹ヶ峯まで、四国横切測量の南半部を測つて戻る。忠敬は体調思わしくなく、下河辺政次郎、青木勝次郎らの一隊が城下から湾岸、湾奥から浦戸までの湾西岸を測る。

五月七日出発、浦戸から西行する。坂部らの別手は、城下經由で九日に本隊に合流した。ご多聞に洩れず、今では浦戸湾内にも埋立て部分が多い。

（題字は伊能忠敬の筆跡）

（鈴木純子）

目次 41号

伊能忠敬生誕二六〇年を祝う

特集1 伊能忠敬故郷を測る 佐原実測図復元

特集2 佐原市の多彩な記念行事から「絵画作文展」

「忠敬祭」「シンポジウム」「フロア展」

特集3 忠敬の前半生 生活の地・佐原

佐原の町並図・三社詣図

特集4 忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて

特集5 佐原知らずの新たな感動

忠敬を詠む（三）

話題

「伊能忠敬大図展 in 武蔵」を終えて

忠敬先生とおおいに語るー前川家の接遇記録

忠敬を詠んだ短歌と俳句

測量隊足跡取材随行記

忠敬の足跡を追った日曜日

道・時空を超えて

八幡宮の伊能像ーよみうり寸評

武揚堂社名杜印の由来

島原街道を行くー伊能忠敬追っかけ記

研究ノート

伊能古文書教室『旌門金鏡類録』（八）

伊能家文書紹介（五）尾形謙二郎書簡

間宮林蔵の東蝦夷地測量

続・忠敬未公開書簡（三）箱田園右衛門書状

忠敬と林蔵 師弟の絆が蝦夷地の地図完成（二）

忠敬がメモしたアイヌ語

忠敬談話室だより

佐原訪問記・大野弥三郎

お知らせ

編集部

二

佐久間達夫 一〇

新沢 義博 一四

山本 公之 一八

伊能 洋 二七

大坪 秀二 二〇

渡部 健三 二二

渡部 健三 二六

垣見 壮一 二八

山浦佐智代 二九

新潟 日報 三〇

読売 新聞 四五

小島 久武 五八

松尾 卓次 六七

小島 一仁 三二

安藤由紀子 三八

井口 利夫 四六

伊藤 栄子 五四

佐久間達夫 五九

佐久間達夫 六六

荻原 哲夫 七〇

編集部 七二

表紙図解説 鈴木純子 写真 伊能洋、福田弘行

佐原の児童が大歓迎 伊能大図214枚がふるさとへ



佐原市民体育館にて 6・10

伊能忠敬生誕二百六十年を祝う

九十九里に偉人誕生！

一七四五年（延享二年）乙丑（きのとうし）十二月間

○二月五日、亀戸天満宮近隣の在家より火出で、元祖信祐が建立せし社頭以下、一宇も残らず焼亡せり。○同十一日より、回向院にて、上州脇屋山正法寺観世音開帳。○二月十二日朝五時過ぎ、千駄谷より出火、青山残らず、桜田、麻布、三軒家、本村氷川社善福寺門前、広尾白金村、三田伊皿子、白金瑞聖寺、猿町、車町、高輪、南北品川迄、焼失。翌十三日、鎮まる。……○八月十九日、大風雨。芝海辺、竜巻あり。○九月十四日、大風、家屋を損ず（浅草福井町銀杏八幡の銀杏古樹、吹き折れる）。 齊藤月岑著 武江年表 平凡社・東洋文庫
○九月、徳川吉宗が引退し家重に譲る。三十年にわたった吉宗の治世が終る。○前年二月五日夜、江戸の空、中天よりやや西に珍しい星座が現れた。正方形の四点とその中心にあたるところに一点の組み合わせ。町民は「嘉瑞」と喜んだ。 読める年表日本史 自由国民社



伊能忠敬 故郷を測る 佐原実測図復元

江戸遊学前の腕試し？入学前の作品？

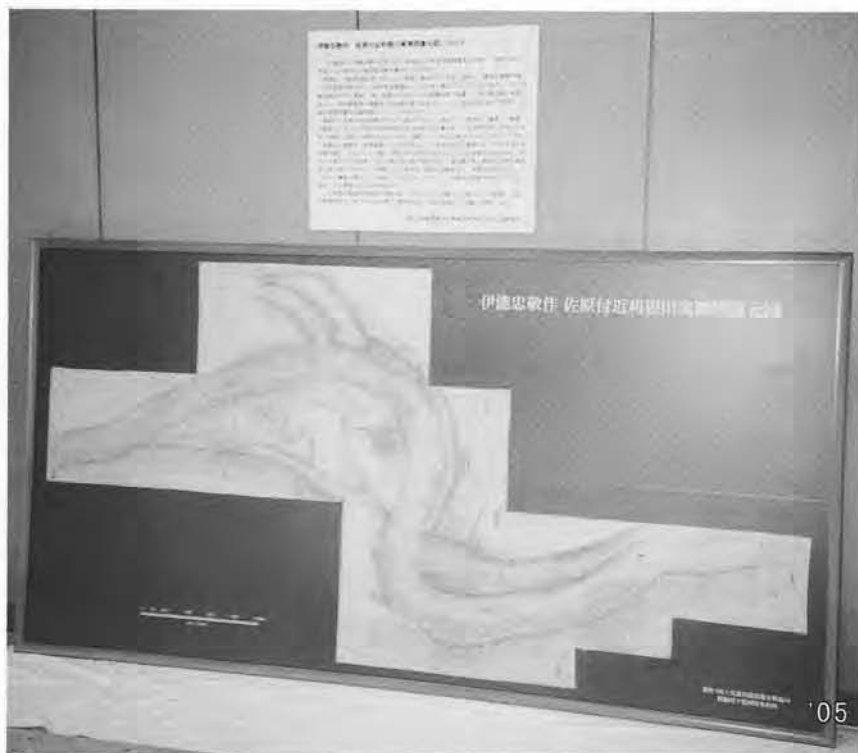
伊能忠敬が当時の佐原村の利根川を測量した実測図が復元され、6月11日12日に佐原市市民体育館で公開された。この実測図は伊能家にあったもので、その存在は一部の研究者の間では知られていたというのが、一般に公開されるのは初めて。

復元図は縦130^{センチ}、横260^{センチ}、縮尺は1200分の1。現在とは違い蛇行していた佐原市周辺のその支流が正確に図面化されており、「佐原」「篠原」「飯島」「粉名口」など現存する地名も記されている。伊能家で保管されていた原図はA3ほどの大きさの和紙16枚に描かれていた。今回日本地図センターで原図をつなぎ合せ、デジタル処理でパネルにしたもの。国土交通省利根川下流河川事務所が製作した。図中の注記に「寛政六寅春引堤」（二七九四年）と書かれており、忠敬が一七九五年に佐原を出て幕府天文方に弟子入りする前に作成したものと考えられている。利根川と共に育った忠敬の夢が込められているようだ。

日経新聞 6月9日のコラムでは次のように紹介している。

『伊能忠敬研究会、渡辺一郎名誉代表は「独学の技術を身近な場所で試したのだろう。江戸に出る前から暦学や天文以外に、測量に関心があったことをうかがわせる」と指摘している』

なお、ふるさと佐原市は、来春から市町村合併により「香取市」になるそうである。



伊能忠敬作 佐原付近利根川実測図復元図



国土地理院長賞
神南小学校
篠塚ひかりさん
(佐原青年会議所
広報誌いなほから)



佐原市の多彩な記念行事から



郷土の偉人「伊能忠敬」の幼少の頃から地図作成に至るまでの生い立ちを勉強し、困難を乗り越えて一つの仕事をやり遂げた業績とその努力を学んだ。

6
•
10

佐原小学校の忠敬祭

香取の神に 守られて
忠敬翁が しいた道
そうだ 教えの 花かおる
道を はてなく 伸ばすのだ



六年生は観福寺を訪ね、「忠敬さん」のお墓に花とお線香をたむける。住職さんの講話を聞いて、忠敬の日本地図作成に至るまでの生涯の足跡を知る。郷土の偉人の業績に触れることを通して、自らの生き方を考えるきっかけとして忠敬祭が行われている。

シンポジウム「世界の忠敬 佐原の忠敬」

「伊能忠敬」をどう生かすか

6・11

佐原市中央公民館に大勢の市民や忠敬ファンが集まる。基調講演から始まる。東京大学史料編纂所教授の横山伊徳氏は「世界史上の伊



能図」を。次に千葉県立佐原高校教諭・酒井右二氏は「伊能忠敬を生む基盤」を語る。忠敬の房総における軌跡、利根川流域の経済力、町場の自治的に気風、文化的土壌の形成など詳細に忠敬のバックグラウンドの特徴を論評される。地元の忠敬研究第一人者の面目十分に。

続いてパネルディスカッションに。コーディネーターは当研究会の星埜由尚代表理事が務める。パネリストは多彩なメンバーが揃っている。基調講演の横山伊徳さんと酒井右二さんに伊能家の伊能陽子さん、NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会副理事長 吉田昌司さん、佐原市立第五中学校長 高橋賢一さん、佐原青年会議所理事長 杉山慎一さん。「世界の忠敬 佐原の忠敬」をどう生かしていくのか。それぞれに豊かな明日に向けての思いを熱心に語り続け、予定時間を越えていた。

里帰りアメリカ大図フロア展 全図公開

6・11・12



大図が床に広がる

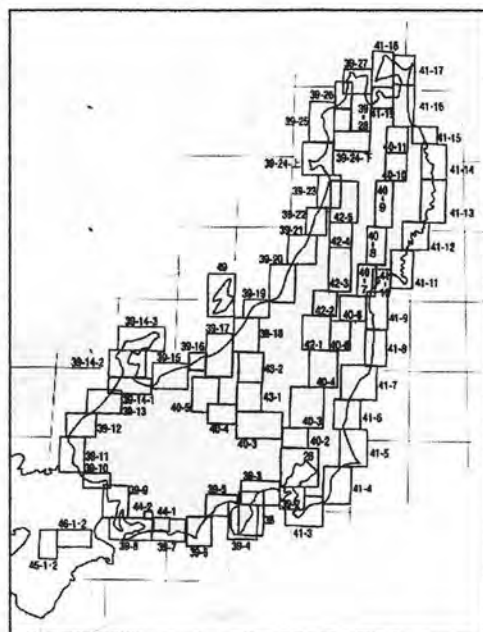


大活躍は青年会議所のみなさん

伊能忠敬記念館に残る大図は六九枚

忠敬は、文化元年（一八〇四）に、寛政十二年（一八〇〇）以来、四回にわたる測量の成果を統合した東半部沿海図を幕府に上呈しています。伊能忠敬記念館には、そのとき献上した大図六九枚の控がすべて収蔵されています。これらの地図は西日本の諸地図より詳しくはな

を認めさせた記念すべき地図でもあります。記念館には全国の伊能図はありませんが、忠敬と佐原周辺の人々の努力の結晶であるこれらの地図は、佐原にとって貴重な資料です。



忠敬江戸入りフオーデーウォーク

「佐原から江戸へ110キロ」 6・9

佐原中央公民館から成田山新勝寺へ向う一行。10日は我孫子手賀沼公園まで。11日は市川関所跡。最終日12日には富岡八幡宮の伊能忠敬銅像前にゴールした。またこの日は銅像前で「伊能忠敬銅像ウォーク」が開催された。

（資料提供、協力）成家淑子さん、

佐原青年会議所、佐原小ほか佐原のみなさん



忠敬の前半生 生活の地・佐原

佐久間 達夫

一、江戸時代の佐原村

佐原村は、利根川の下流域に位置し、北は利根川を隔てて霞ヶ浦や北浦の湖沼を囲んでの水田地帯、西から南の後背地は、下総台地といわれている畑作地帯、それに下総台地に隣接して、魚介類の豊富な十九里の海が広がっている。

そのうえ、江戸幕府の利根川東遷事業によって、承応三年（一六五四）に、利根川の本流が佐原を通って銚子で太平洋に流出するようになった。これによって、東北地方や利根川の下流域の船は、危険な房総沖を避けて、銚子から利根川に入り、佐原、木下、関宿に至り、江戸川を下って江戸へ行くルートをとった。そのため佐原は、水運の中心地となつて河岸が発達し、川船の往来が繁くなった。

村の中央を南から北へ蛇行して流れる佐原川（現小野川）と、それを横切っている香取街道の両側には、「船だまり」や「だし」と呼ばれる荷物の積みおろし用の船着き場、それに倉庫、土蔵が立ち並んでいた。これらの施設のなかには現在も残っているものがあり、当時の佐原河岸の繁栄を偲ばせる。元文五年（一七四〇）の「佐原村鑑明細帳」（伊能忠敬記念館蔵）によると、

佐原村 高瀬船二三艘、ひらた船一七艘、茶船一六艘、

耕作用船（小房丁舟）一一〇艘

と、記述されている。

また、利根川の舟運は、物資の輸送だけでなく、香取、鹿島、息栖の三社詣でをする人も多くなり、それに伴って江戸との文化の交流も盛んになって、小林一茶、十辺舎一九、渡辺華山などの文人墨客が来訪し、地元からも歌人・国学者楫取魚彦、伊能穎則、漢学者清宮秀堅、儒者久保木清淵などが輩出した。

二、伊能家旧宅 佐原市本橋元一九〇〇番地

昭和五年四月二十五日 国より史跡に指定

店舗と母屋 （母屋は寛政五年に忠敬が設計）

家族

・義父 伊能家九代長由（六代景利の三男）

・義母 タミ 多古町南中 平山藤右衛門秀暁の娘

墓地 佐原市寺宿 浄国寺

・妻 ミチ

宝暦十二年十二月八日結婚

寛保二年（一七四二）長由没（三七歳、タミ二〇歳）

三、伊能忠敬記念館

・分館

所在地 佐原市佐原イ一九〇〇番地

伊能忠敬旧宅内

構造 鉄筋コンクリート造二階建

事業費総額 一六、八三一千円

竣工 昭和三十六年四月三日

・本館

所在地 佐原市佐原イ一七二二―一 番地

伊能茂左衛門家敷地跡

竣工 平成十年五月二一日

構造 鉄筋コンクリート平屋建（一部二階）

事業費総額 一、三九九、六〇二千元

指定 国指定重要文化財 昭和三十三年二月十九日

史料 伊能忠敬・忠誨の遺書遺品 二一五種 九六一点

四、伊能家の菩提寺

・観福寺 佐原市牧野一七五二番地

寺伝 寛平二年（八九〇）尊海和尚がお堂を建立

・伊能家の墓地（忠敬関係）

忠敬 法名 有功院成裕種徳居士

妻達 研心院妙唱日鏡大姉

長男景敬 秦鏡院裔誠道研居士

妻リテ 鏡知院咬月亮貞大姉

忠敬後妻信 浄蓮院成実妙貞大姉

長女稲 楞嚴院牀常妙実大姉（華香院妙薫日明）

二女篠 種鏡院霜空妙融大姉

三男順治 智玉院放光慧照童子

五、伊能忠敬の銅像

・佐原市諏訪公園

大正八年三月二日佐原町が建設

碑 文 仰 瞻斗象、俯 画山川

仰いて斗象をみ、ふして山川を画く

撰並びに書 塩谷 時敏

制作者 大熊 氏広

安政三年六月十三日、埼玉県鳩ヶ谷市三ツ和に生まれる。大村益次郎、伊藤博文などの銅像を制作

・佐原小学校

昭和四十三年三月、新校舎竣工記念事業の一つとして銅像制作

制作者 西 俊夫

・伊能忠敬旧宅の敷地

平成十一年二月十一日、西俊夫氏の遺言を受けて、妻君枝氏が、伊能忠敬のブロンズ像を寄贈

六、佐原村絵図

・佐原村新宿亀絵図（伊能家所蔵）

市場 法界寺門前

市神様 上宿の上新町入り口の道路の真中

柏木久兵衛の屋敷 佐原市給食センターの所

・佐原村田地亀絵図（小倉陽一氏所蔵）

船入り場 舟戸稻荷社脇

大木戸 浜宿の香取肇宅

高札場 下仲町鈴木理髪店脇

七、伊能忠敬を支えた人々

・久保木清淵

清淵は、幼名を新四郎といい、家督相続後、太郎右衛門と称した。字は初め蟠龍、後に仲黙と改め、号は竹窓、竹陰などといった。佐原市津宮に生まれ、少年時代、香取根本寺の僧松永北溪に学び、

経学、書道に通じていた。忠敬の全国測量の地図作製に献身的に協力した。又、忠敬の肖像画の上部に記されている「賛」を書いたり、測量隊が携帯した「御用旗」も製作している。

忠敬が序文を寄せた「補訂鄭註孝経」や「香取私記」などの著書がある。文政十二年八月二十八日没。法名は「思恕院至徳清淵居士」という。

・大川治兵衛

大川治兵衛は加納屋治兵衛ともいい、諱は成定という。津宮村下宿（現佐原市津宮）の人で、江戸で両替商を営み財をなす。

伊能忠敬景敬父子に帳元締として仕え、五九歳で没す。法名は「光月院施心覚道信士」といい、墓地は、佐原市の津宮小学校の隣接地にある。大川家の子孫は絶え、三百坪の屋敷跡には、現在三世帯が住んでいる。

・柏木久兵衛

柏木久兵衛は、伊能三郎右衛門家の三世代（十代忠敬、十一代景敬、十二代忠誨）に仕えて、伊能家の家業や他家との交際に裏方として尽力する。また、忠敬の内妻妙諦の父・乙右衛門幸七を養子にする。墓地は、伊能家と同じ佐原市牧野の観福寺にある。子孫は佐原市仁井宿に住んでいる。

八、全国測量参加の佐原人たち

1 第一次測量

・伊能秀蔵

忠敬の二男で、第一次測量から第六次の測量まで、忠敬に従い

測量に参加したが、行ないが悪いとの理由で文化十二年末に父忠敬に勘当されてしまった。

・平山宗平

忠敬の妻の母親の生家の多古町南中の平山季孝の二男。

・吉助 佐原の人であるが、出生宅は不明。

2 第二次測量

・平山郡蔵

平山宗平の兄。第五次測量先で不穏当な行為があつたとの理由で破門される。

・尾形慶助

佐原市香取の神官尾形平馬の子。十六歳の時に忠敬の内弟子になり、久保木清淵に漢学を、会田安明に数学を学んだ。第二次、三次、四次、五次、八次、十次の測量に従う。「伊能東河先生流量地伝習録」の著者。

・伊能秀蔵 平山宗平

3 第三次測量

・伊能秀蔵 平山郡蔵 尾形慶助 久兵衛（柏木久兵衛）

4 第四次測量

・伊能秀蔵 平山郡蔵 尾形慶助 久兵衛

・伊能吉兵衛 佐原の人であるが、出生宅は不明。

5 第五次測量

・永沢藤次郎

山武郡松尾町借毛の秋葉五郎太夫常房の二男。佐原の永沢治郎右衛門征俊の娘と結婚。測量に参加したが宮津城下で病気になるり帰府する。

・伊能秀蔵 平山郡蔵 尾形慶助

6 第六次測量

・久保木佐右衛門

佐原市津宮の人。第六次と八次測量に長持宰領として参加する。菩提寺は香取の新福寺で、同寺の過去帳に記されている「長安朴道禪定門・天保三年三月二十日没、津宮村下宿佐右衛門」が、佐右衛門と推測される。屋敷跡は不明であるが過去帳に「津宮村下宿、佐右衛門」と記述されているので、大川治兵衛家と同じ町内（下宿）に住んでいたことがわかる。

・久保木佐次右衛門（佐助）

佐原市津宮字下宿七八九番地の久保木泰正の祖。第六次と第八次測量に棹取として参加する。墓地は津宮の平野魚店の裏手。菩提寺は、香取の新福寺。同寺の過去帳に記されている「空外道劫信士」が、佐次右衛門（佐助）と推測される。

・神保正作

忠敬の兄・神保貞詮の子

・伊能秀蔵

7 第七次測量

・黒田藤吉（佐原村の人か）

8 第八次測量

・宮野善蔵

大栄町伊能三四四番地、三谷公平氏の祖。江戸へ出て寺田氏の養子になる。第八次測量に参加したが、京都で病氣になり帰府する。三谷家に「忠誠院護国測図居士」という位牌がある。

・尾形慶助 久保木佐右衛門 久保木佐次右衛門

大山甚助（佐原村の人か）

九、東国三社

○ 香取神宮

佐原市香取に鎮座。祭神は経津主命（ふつぬしのみこと）。旧官幣大社。本殿は、元禄一三年（一七〇〇）五代將軍徳川綱吉が造営したもの。社宝に日本三名鏡のひとつ海獸葡萄鏡（国宝）のほか、多くの指定文化財がある。

○ 鹿島神宮

茨城県鹿嶋市に鎮座。祭神は武甕槌命（たけみかづちのみこと）。楼門は、寛永一一年（一六三四）初代水戸藩主徳川頼房の寄進により建立、社殿は、元和五年二代徳川秀忠が奉納、いずれも国の重要文化財に指定されている。

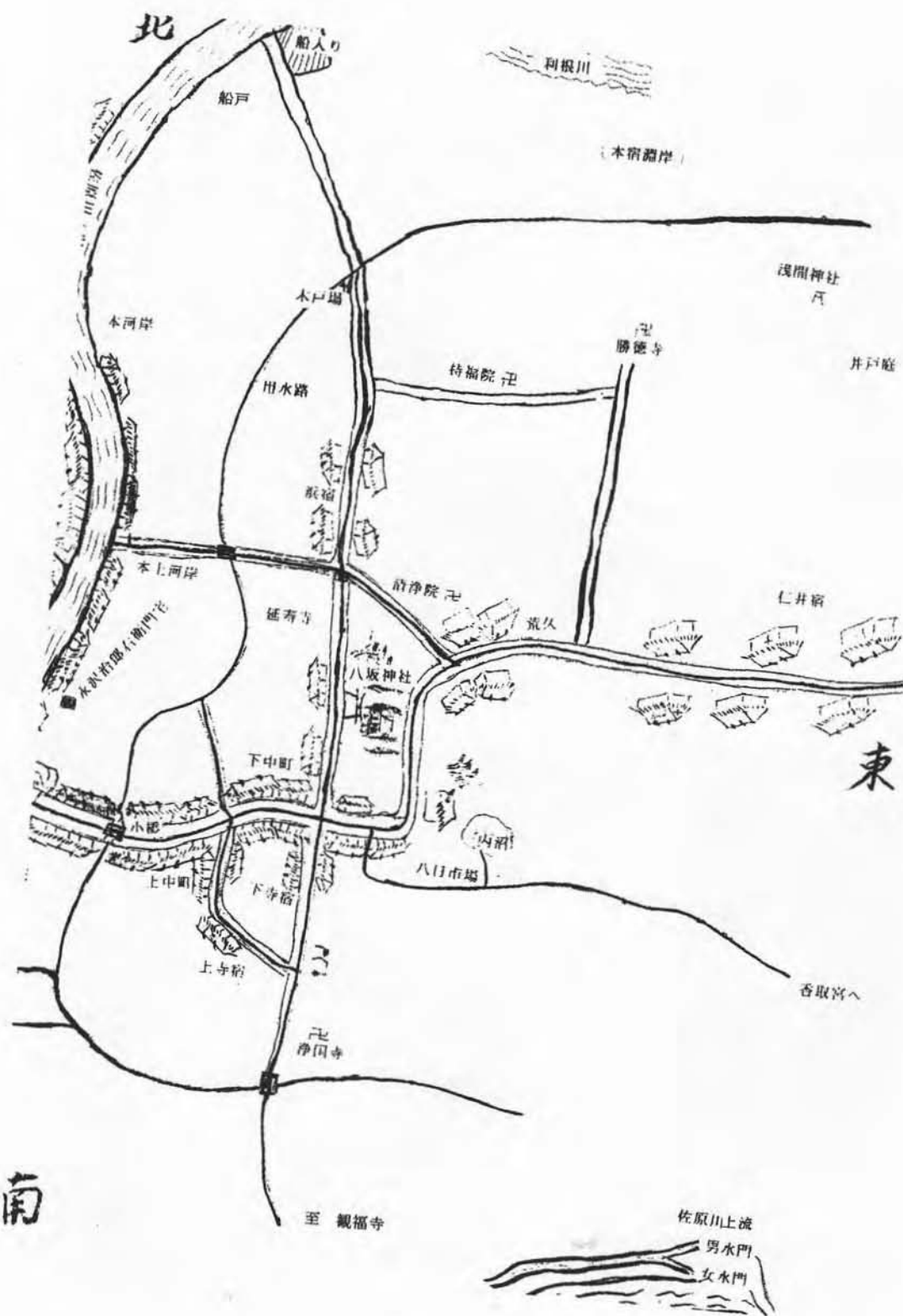
○ 息栖神社

茨城県神栖町にあり、祭神は海の守護神である住吉の神「底筒男（そこつつお）、中筒男（なかつつつお）、表筒男（うわつつお）」の命。『総常日記』には、「水際から三十間ほど離れて海中に鳥居が立っている」と記されている。

江戸時代には、香取、鹿島、息栖の三社詣での人で賑わい、現在は、鹿島工業地帯の一角をなしている。

（さくま たつお・佐原市）

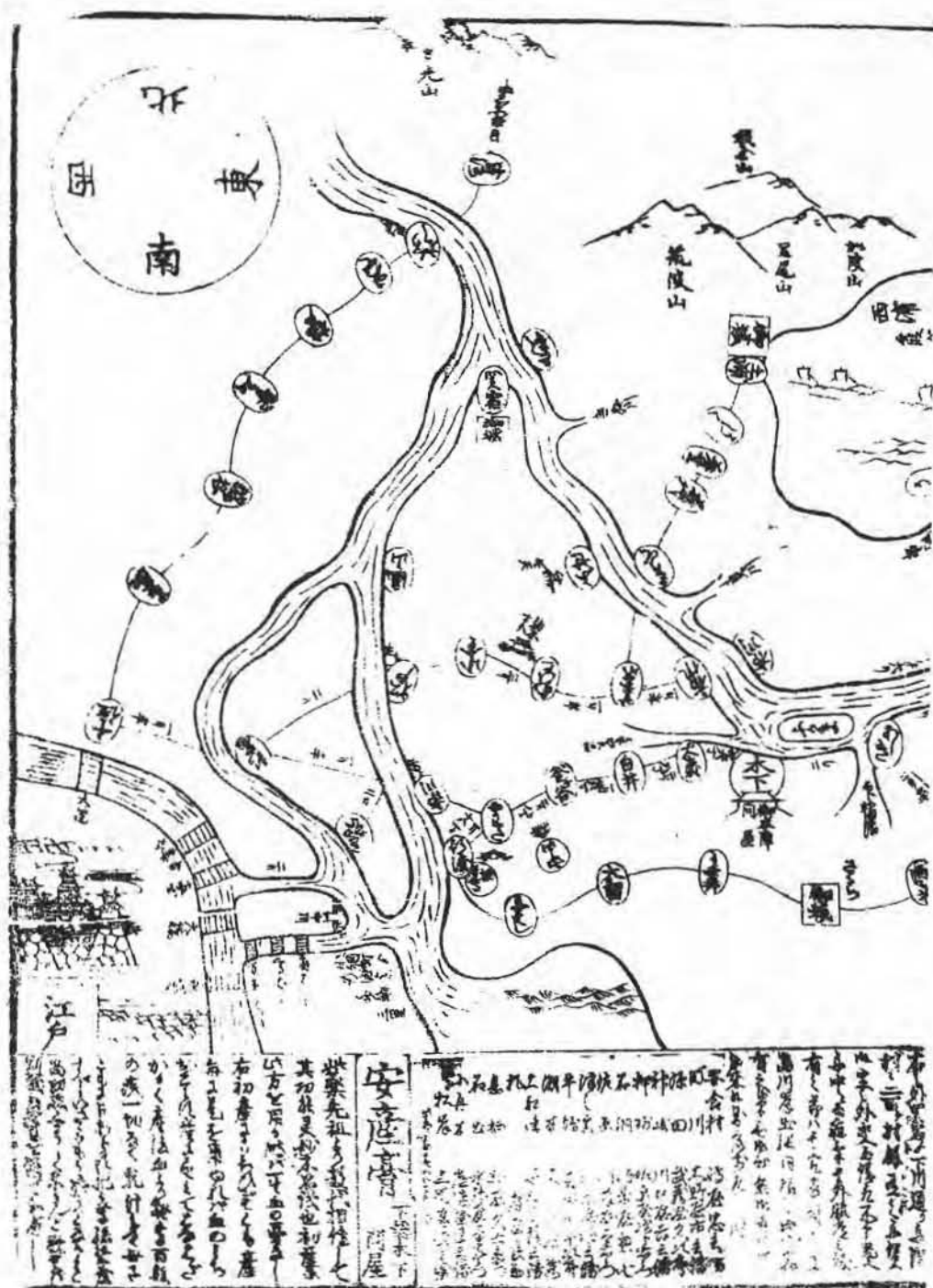




江戸時代の佐原の道路及び町並図
(用水・悪水路を含む)

原本 伊能忠敬記念館蔵
地名・社寺等は、佐久間記。





忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて

新沢 義博

平成十七年六月十一、十二日、生誕二六〇周年として佐原市が記念イベントを行うに当たり、研究会の研修を兼ねた旅行は佐原を訪れることになった。

六月十一日（一日目）佐原市内にある伊能忠敬と関連のある史跡を巡る。



小野川沿いに旧宅、宮定が並ぶ

正午に旧宅隣りの割烹宮定^{みやきだ}に集合する。宮定では映画やテレビのロケで小野川を撮影する際に、出演者が休憩場所として使われ、多くの芸能人の記念写真が掲げられている。



当時の町並み再現図について佐久間さんの解説

昼食後、佐久間先生が当時の町並みを再現した図や絵図を示しながら佐原村における伊能忠敬を説明して下さい。

外に出て旧宅の裏へ。旧宅は昭和五年四月二十五日に国より史跡に指定される。母屋は寛政五年に忠敬が設計。旧宅内にある二階建てのものは記念館の分館。旧記念館ではあるが現在も史料を保存している。

裏庭には市内に三つある銅像の一つが建立されている。他の二つは諏訪公園と佐原小学校にある。佐原小学校にある銅像の制作者、西俊夫氏の遺言を受けて、妻の君枝氏が平成十二年二月二十一日にブロンズ像を寄贈したのが裏庭にある銅像とのこと。また庭の中に水路の跡が一部残っている。敷地内に水路があるというのはよほどの財力を所有していたという証であると佐久間先生の解説。

平成十年五月二十一日に竣工された新記念館へ。エントランスホールに、私としては懐かしい掛軸が三幅。「伊能ウオーク」期間中、その日その日にゴールした自治体の首長さんが署名された伊能中図の掛軸。市町村合併や首長選挙で地名や人名が現在、適用されていない箇所がある。こちらも立派な史料として展示されている。ちなみに私が二年間この署名図を管理・運搬させていただいた。

記念館見学後、バスへ。佐原市のほうで二日間、大型バスを提供してください。ここでちょっとしたハプニング発生。土曜日という

こともあって古い町並みの道は大渋滞。会員を待っていたが後続車の通行を妨げるため、やむを得ず一度その場を離れて市街を一周することになった。時間のロスにはなったが思わぬオプショーンが付いた。先に述べたが大正八年三月二日、諏訪公園に建設された銅像を車窓から拝見することができた。制作者は大熊氏広。他に大村益次郎や伊藤博文などの銅像を製作している。乗り遅れた方には申し訳ないが「急がば回れ」とはまさにこのことではないかと心の中で苦笑する。

全員、無事乗車後、伊能家菩提寺である真言宗豊山派観福寺へ。同寺は八九〇年に尊海和尚がお堂を建立。こちらのお墓には忠敬の遺髪と爪が葬られている。遺骨は上野・源空寺に埋葬されている。

次は小島先生の浄国寺へ。現在は息子さんに住職をお譲りになられ隠居の身と小島先生。先生が興味深いお話しをしてくださる。伊能家の奥方は日蓮宗を信仰されていたため、真言宗である観福寺にある忠敬の妻・達さんの戒名に日蓮宗に命名する「日」の文字が含まれているとのこと。真言宗のお墓に他宗の意味する戒名をつけるのは非常にまれだということをご説明してください。



浄国寺では小島院主から直々に達さんの話を伺う

その後、大図フロア展を見学しに佐原駅からすぐ北にある市民体育館へ。私としては昨年の釧路、日大文理学部、今年に入って幕張と四回目の見学になるが、見飽きることなく四回目の日本一周を伊能大図で行うことができた。今回、目を引いたのは地元の小中学生から高校生までが描いた忠敬の絵。どれも上手に描かれていた。作文もあり子どもたちの時から郷土の偉人を尊敬しているのがよく表われていた。



待望久しく大図214枚が佐原で公開された

香取神宮参拝後、研究会佐原支部長の香取福良さんの自宅を拝見しながら一日目最後の見学地、久保木清淵の墓へ。

常総台地上にあるお墓までは多少登っていかねければならない。佐久間先生いわく、当時頻繁にあった利根川の洪水で、平地にあるお墓は流されてしまうという。あえて水を避けるため山の上にお墓があるという。久保木清淵は忠敬を支え、佐原で一番に忠敬と親しい間柄だった人物。全国測量の地図作製に



久保木竹窓墓所

献身的に協力し、崇敬の肖像画の上部に記されている「賛」を書いたり、測量隊が携帯した「御用旗」も製作したという。

お墓をお参りした後、佐久間先生とお別れする。毎日自宅から利根川まで歩いてお帰るという先生は津宮からご自宅まで歩いてお帰るになるという。一日目、先生のご案内のおかげで忠敬と佐原のことがより一層理解することができた。また、この報告書を作成するにあたり数多くの文面を引用させていただいた。

一路、小見川町を通り東庄町にある今晚のお宿、鯉屋旅館へ。部屋からの眺めはよく、最初目の前を流れる川を利根川と勘違いしたのは小生だけではないであろう。その川は支流の黒部川とのこと。釣り好きの人にはたま

らない土地であることが理解できる。

宴会後、岩瀬市長・秋山教育長・伊能館長がお見えになり、お酒の差し入れをしてくださる。渡辺一郎名誉代表はNHKの大河ドラマで伊能忠敬を実現させるために力を注いでいることを熱心に語られた。

二日目は午前八時半に鯉屋旅館を出立。

潮来市在住の窪谷さんのご案内で息栖神社・鹿島神社を参拝する。

昨日の香取神社を含め、東国三社を二日にわたってお参りすることができた。

昼食地である塚本そば店近くの郷土資料館では全国的に著名な潮来の花嫁さんの衣装等を見学する。本物の嫁入舟に乗り記念写真を撮ることができた。

そのあと、一一八五年に源頼朝が開基した臨済宗妙心寺派の長勝寺をお参りする。禅寺らしいたたずまいの中、ふと京都にいるような錯覚におちいるほど風情あるお寺で、潮来にこれほどの由緒ある古刹が存在するとは知らなかった。窪谷さんが谷玄明住職にお願いして特別に本堂の中に入れてもらうことができた。十五分間ではあったが住職から潮来は水戸藩の飛地だったことから同寺は水戸光圀と縁が深い寺だったことや、貴重な仏の



左、長勝寺にて・藤岡家墓所 上、花嫁花婿ご一同

悟りを拝聴することができた。

昼食後、窪谷さんとお別れしアヤメが咲き乱れる佐原市立水生植物園へ。四〇〇種一五〇万本の東洋一の見事なアヤメで埋め尽くされている。あらためて佐原は水郷の町であることを実感することができた。

バスはJR潮来駅で鉄道利用の方を降りし、高速バスの停留所へ。停留所で今回お世話になった佐原支部の香取禰良さん・本郷さん・成家さんに深々とお礼しお別れする。

正直申し上げて私にとつては伊能ウォーク終了直後、ゴール報告に行つて以来の佐原訪問であつた。元をたどれば大学生の時、卒論でお世話になったりして、初めて佐原を訪ねてから十五年ちかく時が経っている。古い町並みは当時と変わりなく残っている。今や都心からは高速バスを使えば一時間足らずで行くことができる。

今回、地元の方のご協力のおかげでゆかりの地、佐原を十分に再発見することができた旅行会であつた。

(しんざわ よしひろ・

元伊能ウォーク本部隊

朝日新聞開発、学芸員)

生誕記念行事参加者

50音順・敬称略

安藤 由紀子	八千代市	安藤 博敏	鴻巣市	新入会員
伊藤 栄子	練馬区	伊藤 靖子	所沢市	
伊能 敏雄	佐原市	伊能 陽子	世田谷区	
伊能 陽子	世田谷区	今村 恵二	白井市	
江口 俊子	千葉県山武町	大沼 晃	藤沢市	
荻原 哲夫	北区	柏木 隆雄	市川市	
香取 禰良	佐原市	香取 秀紀	佐原市	佐原支部長
久保木 恒雄	柏市	窪谷 二郎	潮来市	
新沢 義博	江東区	鈴木 純子	東久留米市	
鈴木 皓之	杉並区	塚本 倫正	成田市	
中川 幸子	世田谷区	成家 淑子	佐原市	

丹羽 菊乃

世田谷区

原田 照男

神戸市

福田 弘行

新座市

星埜 由尚

つくば市

本郷 靖枝

佐原市

宮内 敏

銚子市

矢能 彰

さいたま市

山口 惣司

千葉県東庄町 新入会員

山本 公之

小平市

渡辺 一郎

多摩市

名誉代表

特別協力

佐久間達夫

小島 一仁

懇親会来賓

岩瀬 佐原市長

秋山 教育長

伊能 記念館館長

今回の佐原探訪につきましては、香取禰良佐原支部長はじめ、香取秀紀さん、成家淑子さん、本郷靖枝さんほか佐原のみなさまにたいへんお世話になりました。天候にも恵まれ、お陰さまで有意義な二日間でした。厚く御礼申し上げます。事務局

佐原知らずの新たな感動 一断片

山本 公之

矢張り地元に来ると空気を吸うだけで緊張する。雨の心配もなく、忠敬先生が歩いていた同じ地面を同好の諸兄妹と懐古逍遙する。

あやめを両岸に見ながら、高瀬舟から揚がつて自宅に戻る忠敬先生が眼に浮かぶ幻影。私のインスピレーションが悩みの種ですが……

恥ずかしい話ですが、飯田橋のマンション六階は研究会の前の事務所。手伝いを始めて間もなく一人で留守番していた時、「折角東京まで出てきた年寄が、帰るまでに是非とも佐原の記念館に行ってみたくて言うのです。そちらに聞けば、教えていただけると申して居りますのですが……」と、会員の奥様が、身寄りのお方と覚しき温もりのある電話でした。この即答しなければならぬ事情にすっかり私は混乱して、記念館の電話番号をお教えるのが精一杯でした。まだ一度も行っていないのでとは、正直言つて外聞が悪いし、そんなこんなで、先ずは自分が佐原に出掛けようと内々に計画し実行に移しました。「佐原初体験」というわけでした。

足元を気遣つての急な狭い小道を登り詰める。参加した研修会員の熱意が頂上に溢れた。それまで回ってきた所は、一般の人にも馴染みでしょうが、ここまで足を延ばすことは少ないか、恐らくあるまい。伊能忠敬その他この地域の方々の伝達宜しきを得なかつたら正直のところ「伊能図」はできなかつたでしょう。久保木太郎右衛門清淵の墓が今回の研修旅行のクライマックスではなかつたらどうか。参加

者に配布された郷土愛が偲ばれる佐原市津ノ宮地区図は語ってしましたし、もう一度来られるかどうか、忘れられない極点になった。

かけ離れて恐縮ですが、1997年の東京大学建学明治10年と題した「創立120周年記念東京大学展」学問・現在・未来の図版のトップバッターは、伊能忠敬の遺品「彎窠羅鍼」です。曰く、これは伊能忠敬(1745~1818)

が、方位角の測定に用いた方位盤の一つ。目盛りはクリノメーターと同じく逆目にふられいる。伊能忠敬から地図作成の協力者久保木太郎右衛門に贈られた。「文政元年(1818)年以前/久保木太郎右衛門旧蔵/総合研究博物館地理部門」と紹介されている。しかし、今度の佐原支部の皆さんとの出会いがあったればこそ、地元の行き届いた体験研修がいに貴重であるかと言える。今後とも幾久く、ご指導を仰ぎたいものと存じます。



鹿島神宮では久しぶりに鹿を見たりしましたが、当日の恒例の武術の公開で、その昔懐かしい塚原ト伝を全く知らない若い会員さんが居ことを識り、若しかして時代が移り伊能忠敬を識る人が無くなつたら我々研究会の責任だけでは済まされなくなるのではないでしょう。

(やまもと きみゆき・小平市算数を楽しむ会)



後列左から 山本、伊能洋、香取秀、矢能、大沼、原田、江口、今村
本郷、星埜、伊藤、鈴木皓、伊能陽、久保木、井上、鰐、安藤、新沢
前列左から 香取福、渡辺、中川、鈴木純、丹羽、成家、荻原のみなさん

2005年6月12日、
佐原市立水生植物園
あやめまつり会場



『伊能忠敬大図展 in 武蔵』を終えて

報告とお礼

大坪 秀二

◆ 私たちの願い

アメリカにあった伊能大図の国内展示が企画されていると報じられたとき、私たちの学園もその会場のひとつに加えて頂けないだろうか、無謀ともいわれそうな願望を抱いたにはわけがあった。

たかし ひろし

忠敬から数えて直系の七代目に当たる伊能敬、洋のご兄弟が二人とも武蔵学園の卒業生だというだけでなく、敬氏は95年に他界されるまで四〇年余にわたり学園の専任教授であり、化学史への造詣も深く、また、大学図書館長、人文学部長などを歴任されたし、洋氏は73年から三〇年近く武蔵中学高校で美術を担当、発想豊かな授業で生徒を啓発された。敬氏はフランスのペイレ氏蔵中図が佐原で公開されるのを見ることなしに、その年の春に亡くなられたので、私たちは敬氏の思い出のためにも、大図展に武蔵へ来て欲しかった。

一方、伊能洋、陽子ご夫妻については、大図の彩色のこと、伊能家文書その他の解説のことなどでこの一〇年ほどの活躍を目のあたりにしてきたから、私たちとしてはお二人を頼みの綱とも考えたわけであつた。

このような、伊能家と武蔵学園との深い縁に連なつて、『大図展 in 武蔵』が主催者側のご理解をいただけたのであらうと思つている。

◆ 展示の実際

実際の仕事は、他の諸会場と同様な大図フロア展示および一連の解説的展示と、武蔵学園が独自に行う展示とに大別された。

メインの展示である前者の現場での仕事は、一切が日本地図センターの方々のご苦労によるものである。私たちは既に他の会場の展示を見てはいたものの、事前の作業を目の前で見ることが出来たのには新鮮な喜びがあつた。忠敬最後の仕事となつた江戸府内図や、本学園周辺百年間の変遷を語る20万国四枚も追加して頂いた。

後者、武蔵学園側の展示はすべて伊能家から借用の資料を用いて、大学学芸員課程の学生たちが実習授業の一環として、教授の指導の下に計画し作業したものである。忠敬自身が模写した美しい彩色の世界地図、伊能家で現在も解説が進められている文書や地図下絵、それと浅草源空寺にある忠敬墓墓碑銘の拓本（伊能家から借用のもの、コピー）を使つての墓の実物大模型、これら三種類で構成された。

本学園の学生生徒はごく身近に、とくに中学・高校生は授業の一環として、見学できるという幸せを得たが、一般の人々がどのくらい来てくれるのか、それが最後まで不安であつた。それでも七日間に五千人近い来観者があつて、小さな展示会場としてはまずまずの成果だった。それよりも、土曜日午後の講演会が予定の会場（五〇〇席）では足りず、予備の小講堂まで使つて行うことになったのは来観者の関心の深さを示していたと思う。

◆ 会場での感想

22 × 18 m² のこぢんまりとした会場に、関東から近畿まで73校

の大図を並べた。日本地図センターの方々や、多摩自然科学研究会の有志の方々、また、伊能家文書関係では解説を担当された伊能忠敬研究会の方々が、毎日熱心に説明にあたって下さった。地図の上に坐って、手について細かい字を読む人々が目立った。自分の郷里のあたりを熱心に眺めて、親から聞いた覚えのある近隣の地名を発見して嬉しがる人も多かった。富士五湖が何故二つしか書かれていないのかとか、浅間山の形が本物と随分違うとかいう、線の測量で成り立っている伊能図の限定された性格に関わる質問も多く寄せられた。詳細に観察して実測の導線が赤で記入されていること、宿泊地や天測のマークまで入っていることなど、新発見に喜ぶ熱心な観察者も少なくなかった。いずれにしても、一人一人がこれほど長時間会場に止まる展覧会は珍しいのではないだろうか。また、学園の展示でも、文書等の数を抑えた(13枚)おかげか、すべてを読んでゆく人が多数に上った。これも素晴らしいことだった。

神田明神から学園までのウォーキングを行って下さった日本ウォーキング協会のご厚意もあったし、講演会に対する練馬区教育委員会からのご支援もあった。なによりも、「アメリカ伊能大図展実行委員会」としてこの全国巡回展を企画実行された主催者側すべてのご厚意が有難かった。学園側の一人として深く感謝申しあげてこの報告を終わります。

(おおつぼ ひでじ・武蔵高等学校中学校 元校長)



忠敬先生おおいに語る―前川家の接遇記録―

渡部 健三

文中○は筆者注記

◇『測量日記』で測量隊の足どりを追う

享和元年（一八〇一）九月二十五日、三陸沿岸を北上中の第二次伊能測量隊は、仙台藩領唐丹村から盛岡藩領に入った。その日は釜石村（現岩手県釜石市）に一泊、次いで二十六日は大槌町（上閉伊郡大槌町）に止宿し、翌日は雨天のため逗留。

二十八日（西暦では十一月四日）の日記には

（前略）大槌村、それより吉里々村（きりきり村）大槌町吉里吉里。前川善兵衛なるものあり。富家にて世々知るところなり。もつとも、旧家にて三、四代以来は南部（盛岡藩主南部氏）家中となり、富ははるかに劣れりという。立ち寄りて一覽す。

と記されている。

吉里吉里に住む人たちは、この話をよく承知しているせいか、伊能忠敬と前川善兵衛との出会いの様子を知りたがっていた。

平成16年11月20日『岩手日報』は、

「伊能忠敬」寄つて居た―大槌の豪商・前川家に

との見出しで、前川家古文書の発見と解説を報じたので、企画展開催期間中に出向いた。

ここであらましを紹介したい。

◇前川家小史と同家記像の発見

吉里吉里といえは井上ひさし氏の小説『吉里吉里人』で一躍有名になった土地柄である。

その吉里吉里の前川家は、「三都（京・大坂・江戸）二名の聞得し善兵衛」（『飢饉考』）とか、「みちのくの紀伊国屋文左衛門」などと囃されるほど、江戸中期には盛岡藩を代表する巨大な商人資本として、「吉里吉里善兵衛」の異名で知られていた。

『当世代々記録』と系図や過去帳などによれば、もと伊豆の清水富英なる者が小田原北条氏に仕えて相模国前川邑に家領を与えられ、津方（港津・船舶）関係を担当していた。しかし、北条氏が滅亡したため廻船で奥州に逃れ、さらに、その子の富久が吉里吉里浦に移住して前川家を創始したと伝えている。

二代善兵衛富永が元禄期から廻船問屋として台頭すると、閉伊地方の水産物や豆類などの他領移出を中心に経営を拡大するとともに、付近一帯の漁業権を掌握することになり、次第に酒・味噌の醸造業も手がけることになった。

三代善兵衛助友は自ら建造した大型廻船数艘による交易で、江戸・東北を結ぶ東廻り航路を開拓し、とくに漁業資源を商品化していく。

このような商業活動は、三陸沿岸の漁業生産地帯に恒常的な御用金上納者を育成しようとする盛岡藩の政策に便乗することにもなり、延享から宝暦の前半が最盛期であつたと考えられる。

やがて、宝暦期を境として、盛岡藩の御用金徴収政策の犠牲をも強いられた。とくに宝暦三年（一七五三）、幕府から日光東照宮修復の命を受けた南部藩が、七万両という費用を藩内の富商らに割り当てたとき、四代善兵衛富昌は七千五百両を捻出せざるを得なくなったため、さしもの前川家の経営も傾きはじめたといわれている。

岩手日報 2004年11月20日

伊能忠敬 寄っていた

大槌の豪商・前川家に

町記録発見が 測量や歓談の様子



前川善兵衛の古文書解読で見つけた伊能忠敬の大槌訪問を伝える資料パネル

江戸時代に全国に名をはせた「海の豪商」前川善兵衛（通称・吉里吉里善兵衛）の顕彰事業として前川家歴代の古文書解読を進めていた大槌町は、日本最初の実測地図を作製した伊能忠敬（一七四五―一八一八年）が測量の途中、前川家に立ち寄った際の記録を発見した。歓談の様子や測量経過がつづられ、当時を知る貴重な研究成果だ。町立図書館で二十日から開かれる「ニ文化財展」で資料の一部を公開する。

きょうから一部公開

伊能の記述が見つかったのは、前川家文書「不時臨時公私所用留」の一冊。三陸沿岸を北上しながら測量した伊能は一八〇一（享和元）年九月二十五日に釜石着、大槌で家来を連れ山駕籠で訪れた二十六日から後藤茂伝治

か、初めての訪問先では飲まないという酒や吸い物、肴二、三種を差し上げた」とある。

伊能は「今年（一八〇〇）沼津浦から順調に測量して来た」とし、「住まいは深川八幡近くなので、

江戸に登られた折には是非訪問してほしい」と語った様子も記述されている。

前川家文書は約三千八百六十点に及び、藩制時代の水産業や経済構造を知る資料として水産総合

研究センター（元水産庁中央水産研究所）が所蔵。町は二〇〇二年度から原文をCD-ROM化（全三十八巻）し整理事業を展開。解読作業は本年度

内に約60%が終わる予定だ。

同町の佐藤千穂子解読研究員は「伊能の記述部分は解読作業中に見つかった。膨大な資料の中から存在を確認できて驚いた」と話す。

山崎衛社会教育課長は「研究成果の発表は初めてとなる。郷土の先人を知る機会になればいい」と来場を呼び掛ける。同展は二十八日まで開かれ、町内で出土した木製品なども展示する（二、十一、二十三日は休館）。

展示パネル

つまり、御用金賦課への代償としての特権は形骸化したといえよう。一方、宝暦の大凶作の翌年、大槌通では多数の餓死者があったとされ、このとき善兵衛は私蔵を開き、大槌・吉里吉里両村の難民や往来の運びと延べ三万二千人に雑穀を振舞ったとの記録もある。

五代善兵衛富能は斜陽化を必死で食い止めようとしたが、不漁続きという不運も重なり、やむなく事業の縮小を余儀なくされた。

忠敬の前川家訪問は、六代善兵衛富長（一七七一一八四二）の代であった。富長は当時三十歳前後のはずである。その八年後、那珂湊の近藤民四郎より造船費を借り受け、廻船「吉祥丸」を完成させているが、さらに六年後、江戸表に出航中の御免石船「明神丸」が銚子川口で破船するという不運に見舞われることになる。

（以上は『図説岩手県史』ほかを参考にした）

現在は、最盛期にくらべて同家の所有地は狭くなったとはいうものの、ご当主は健在で、近くの前川家歴代の墓（町指定文化財）や前川稲荷神社が往時を偲ばせている。

◇ 前川家文書

いわゆる前川家文書は約三千八百点あり、藩政時代の水産業や経済構造を知る資料として水産総合研究センター（元・水産庁中央水産研究所）に所蔵されているとのこと。

大槌町は二〇〇二年度から整理事業を開始し、解説作業を継続しているが、その成果のひとつとして「伊能忠敬の前川家訪問」関連資料を展示した。前川家に伝わる『不時臨時公私諸用留』のうちの貴重な記録である。



〔解説文〕

同享和元年酉九月、御領内者釜石浦より、宮古嶽ヶ崎浦迄之御配府到来、從 公儀為測量御用之伊能勘解由と申す御方、浦々御巡行被成ニ付、人馬宿等之御先触有之、其後九月廿五日釜石へ御着ニて、御下役佐野京助殿被相詰候由大槌へ廿六日御着、後藤茂伝次売名ニ御止宿、雨天ニ而一日御滞留有之、廿八日御発駕御廻村、安渡へハ入口ニて御見量有之、直々吉里々々へ街道筋、間地竿為御打、御通被成候然ル所、此方義及御聞之由ニて、御立寄可被成之内意承候ニ付、其心へニ罷在候所一僕召連山駕籠ニて御尋、玄関より座敷へ通申候て、上下着用半平罷出挨拶申候所、心易く念頃之御咄ニて、召席御茶、餅菓子等差出シ其後初て之儀、不被用由ニは候へ共、

御盃上ケ御吸物、御取肴二、三種差出

申候 右の御仁、銚子浦近村相良村之大家、百性伊能三郎右衛門之親隠居シテ勘解由と名乗候旨、多年此方儀被及聞候故、此筋相廻候御用序て推参被相尋候由、岩城四ツ倉甚左衛門へハ同人より相招キ被立寄候由御咄有之、頓て御出立、大沢峠迄饅当進候處、入念之御礼被申越候 右勘解由子息、三郎衛門へ家督隠居被致候所、天文方御用ニて御雇ニ被成ヲ、当年者豆州沼津浦より、段々浦方順道被相廻候旨、松前蝦夷地ハ去年被相廻候由、右勘解由、江戸深河八幡近辺之住居之由、江戸表へ罷出候ハ、天文隠居勘解由と相尋候得は相知候間、立寄候様ニと念頃ニ被申置候 尤公儀天文方御役人高橋作左衛門、門弟ニ罷成居候旨、右後年、此類之御用ニて罷越候方も可在之哉と、為見合之当春書記置

享和貳年壬戌正月書留置

〔現代文〕

同じく享和元年酉九月、ご領内の釜石浦から宮古嶽ヶ崎浦（宮古市嶽ヶ崎）までのお触れがあった。公儀測量御用の伊能勘解由といわれるお方が浦々を巡行されるので、人馬や宿などの調達についてのお先触れである。その後九月二十五日釜石に到着され、下役佐野京助殿が詰められたとのこと。

大槌二十六日ご到着。後藤茂伝次売名（測量日記では藤屋伝兵衛）にご止宿。雨天のため一日滞留された。二十八日にご出発、ご廻村。安渡（あんど）大槌町安渡）では入口で目測があり、直接吉里吉里へは街道筋に間地竿を打たせて通られた。

ところが先方様は当方のことをお聞き及びらしく、お立ち寄りくださるとのご内意を承ったので、その心づもりで待機中、伊能様は下僕一人を従えて山駕籠でお訪ねくださった。

玄関から座敷へお通しし、半平（六代目善兵衛富長の通称）が袴を着用してご挨拶したところ、心やすく丁寧なお話ぶりである。

お茶、餅菓子などをお出しし、初めての訪問先では召しあがらないとのことであるが、お盆を上げ、お吸物、酒肴二、三種を差し出した。



付近の参考図

お話によれば、このお方は銚子浦近村の相良村（佐原村）の大家、百姓伊能三郎右衛門の親で、隠居して勘解由と名乗っているが、私どものことは多年にわたり聞き及んでいたもので、御用のついでに訪問したいと思い、まわり道されたとのこと。なお、岩城の四ツ倉甚左衛門（前川家との商売仲間）では同人から招かれたとお話であった。

ご出立され、大沢峠（通称四十八坂。吉里吉里・船越間にある難所）まで弁当をお届けしたところ、入念のお礼を申し越された。

右、勘解由氏は子息三郎右衛門へ家督を譲り隠居されて天文方御用に雇われているが、今年はい豆沼津浦から逐次海辺伝いの道をまわってきたし、松前蝦夷地は昨年まわられたとのことである。

勘解由氏は江戸深河（深川）の八幡宮近くに住居があるので、江戸表に出たときは、「天文隠居勘解由」とお尋ねになれば分かるから立ち寄りたいと、ねんごろに申されていた。もつとも、公儀天文方御役人高橋作左衛門の門弟になっているとの話である。

右、後年、この類の御用でお出でくださるお方もあるかと思われるので、その対応の参考のために、この春に書き留め置く。

享和貳年壬戌正月書き留め置き

本稿作成にあたって、前川家文書の解説を担当された金崎昭文氏からご教示いただき、また、伊藤栄子さんにご校閲を賜りました。厚くお礼申しあげます。

（わたなべ けんぞう・

無明舎出版『伊能測量隊、東日本に行く』著者、盛岡市）

忠敬を詠んだ短歌と俳句 渡部 健三

第三九号には、山本公之さんが短歌を、また武川芳男さんが川柳を紹介されましたが、ここでは新聞・雑誌などで見かけた作品をご紹介します。

馬場 あき子 選

忠敬が来り測りし唐丹湾望洋の丘に星座石あり

盛岡市 熊谷 ながよし

【評】伊能忠敬は近世中期の測量家。釜石市の唐丹にその天文学上の課題解決から発した測量の事績が残されていて、感慨深い。

『岩手日報』平成十一年十二月二日夕刊「日報文芸」

小著『伊能測量隊、東日本をゆく』（無明舎出版刊）で紹介した作品です。

田谷 鋭 選

ある時は歩幅に測りし蝦夷の地か伊能大図を幕張に見つ

八王子市 小柳 清治

【評】伊能忠敬は江戸後期の地理学者、測量家で上総出身。ここの「幕張」も千葉の地名。自分の歩幅を承知していて、ある時は測量に役立てたのか。興味深い作。

『読売新聞』平成一七年二月二八日「読売歌壇」

忠敬の測りし道や寒鴉 盛岡市 野村 房子

『いわて・ねんりんクラブ』平成一七年二月号「俳壇」

「忠敬を詠む」(三) 伊能 洋

前にも述べたように、決して佳句とは思えないが、
記録としての意味もあろうかと、十年ほどの間に
山暦誌に載った忠敬関連の何句かをお目にかける。

洋句帖より(山暦同人)

秋燕忠敬偲ぶ星座石

釜石・唐仁町
とうに

故郷の蔵がらんど花齊なずな

鳥渡る平戸に出会う忠敬図

幕引くや春光を指す忠敬像

九十九里忠敬像除幕二句

早春の潮の香とどく忠敬像

酌む酒は「忠敬」にして年新た

春の星函館山の忠敬碑

夏菜黄ぐみの跡かたもなし土蔵裏

忠敬旧宅

風抜ける忠敬書斎柿若葉

伊能図に釜山プサンの山の名白木むくげ樫

対馬韓国展望所

青葉潮最南端の「伊能之碑」

屋久島にて記念植樹

天高し白寿の筆の忠敬碑

小倉・測量記念碑除幕式

忠敬の墓所あかあかと桜しべ葉

佐原・観福寺

忠敬の四人の妻や彼岸花

忠敬に見せむと玉の浦椿植う

福江島より

秋高し一步を踏み出す忠敬像

富岡八幡宮銅像除幕式

秋海棠りょうてい量程車に乗り遊びしよ

深川の忠敬像に初詣

秋燈しらラnde曆書細字なる

間重富遺品

エゾキスグ最東端の測量地

別海・忠敬記念柱除幕

クナシリは野花菖蒲の向ふかな

御用旗冬至の影を曳いてをり

日大文理学部展二句

伊能図の冬の海踏む百歩かな

測量隊足跡取材随行記

垣見 壮一

新潟日報社の編集局神田学芸部長代理から、毎日曜日に掲載している「道・時空を越えて」に伊能忠敬の越後での測量経路を取り上げたいから、県内の行動とエピソードを知りたいとのこと。早速、小林支部長と対応、「糸魚川事件」と海府（笹川流れ・山北町・村上市）の誠実な村民を提案した。記事と写真は現地を見てとのことなので神田さんの取材に山浦会員と同行する。

村上市岩船港から伊能測量ルートを逆行、測量日記と大図で地名を確認しながら海岸に沿った道を北上する。雨天のため人影も少ない。建築学者ブルーノ・タウトが「眼前を去来する風光の変化は言語に絶する」と賛美した笹川流れは、朝日連峰が日本海になだれ込む荒々しくも美しい風景と、観光地特有のざわめきと音楽放送もなく海鳥の鳴き声と自然の音のみの静寂に心がやすらぐ。

時折激しくなる雨に測量日誌の「馬下峠の下り口にて霰雨に逢」を話題とする。時節的に早い気もするし、千葉県史料測量日

記には「霧雨」とあるが、霧雨程度では記載することも無いだろうからやはり「あれ」だろうと素人三人で了解する。

ちなみに、山形の雪の初日は一九一八年十月二十五日（理科年表）、新潟の同年十月の気象記録に「中旬以降ノ温度ハ激変ニシテ霰雪ヲ降ラシ俄ニ寒氣早来セリ」とあり、享和二年「諸国洪水・出羽庄内洪水。文化年間江戸大雪・隅田川凍結」の記録もあり、当時冷害飢饉も多く相当寒冷な気候であったと思われ、北国初冬の測量外業の苦労を忍ぶ。

「海府通行三日之内風波なく、是ハ村々貞実の徳ならんと感しけり」の好天を喜ぶ測量日記も納得する。

勝木海岸で、薪を燃やし海水を長時間煮詰めた塩と海草ホンダワラによる藻塩の素朴な製塩所があり、海府（海の部）という地名に古代から製塩が有ったものと考えられる。薪の炎と村人の心温かい対応が二百年前に思考をタイムスリップさせる。

神田・山浦さんも赤々と燃え上がる薪の炎をとおして測量隊の難所越えや、海上の小舟に忠敬先生と郡蔵さんの姿が見えたのではなからうか。

海岸の岩場に壊れかかったお堂があり、

小川未明の「赤い蠟燭と人魚」の物語を思う。古いお堂なので忠敬先生も見たのではないが、神仏を敬する人だから手を合わせただろうと三人で想像をたくましくする。

地元の郷土史研究家（教育長として教育現場に伊能測量の実習を実施）本間陽一先生に測量隊宿泊地等に含蓄のあるお話を戴く。

大難所の無類の絶景と今も変わらぬ村人の素朴な心の温さに魅了され、退職後は測量日記に従い十月十二日越後測量起点の庄内領境から、ホコ立、ボタン岩（伊能日記に敬意を表してか五万分の一地形図に記載あり）等記名岩石や、白砂の海岸は減少したけれど卑・潤等を頼りにたどりたい思いを強くした。

記事は好評で神田記者の透徹した眼は、「言葉通り、ここで中断していたら、歴史はどう回っていただろう」と幕末開国時に伊能図が果たした役割に的確な評価をくだし、末文の「病や体力の衰えと闘いながら：第二の人生にかけた男の挑戦。その魅力に引かれ、足跡をたどる旅に出るひとは、今も少なくないという」の心温かい文に感動を感じた。

（かきみ そういち・新潟市）

・時空を超えて・

忠敬の足跡を追った日曜日

山浦 佐智代

新潟県北部に位置する山北町（さんぼくまち）。海岸線には『笹川流れ』と呼ばれる景勝地がある。日本海の荒波に、もまれて出来た奇岩や奇岩礁が、白砂と交じり合い十一^{*}にもおよぶ美しい風景を、創り出している。

千八百二年（享和二年）伊能忠敬（当時五十八歳）は、第三次測量の一環として、山形側からこの山北町に入っている。

この時の忠敬の測量日記には、笹川流れを絶賛、山北町の人々の親切に感動し、感謝していたことが記されている。

五月の或る日、新潟日報（本社・新潟市）の記者が、忠敬の足跡を求めて山北町取材する、という話を聞いた。情報発信者は新潟支部の垣見さん。取材する日は五月十五日（日曜日）。私は、その『取材』の話にとっても興味を引かれ、急用さえなければ、ついでにきたいと、垣見さんをお願いしておいた。

当日何とか都合がついたので、日本海東北自動車道の中条インターチェンジ（笹川流れ

まで四十数^{*}の地点）まで出向いた。そこで、垣見さんに乗せた新潟日報編集局の神田敬輔さんの車に同乗させていただいた。

前日の天気予報では、曇り・一時雨・後晴れの変化の激しいものであったが、この予報は見事的中した。笹川流れに向かう途中、雨がポツポツと降り始め、徐々に雨脚を強めていった。忠敬が、通ったと思われる場所を探す頃には、ついに土砂降りの雨になってしまった。しかし、昼食休憩を取っている間に、雨雲は少しずつ消え去り、晴れ間ものぞくようになった。

車中では、垣見さんが、神田さんに、二百年前に生きた忠敬の業績や人柄について、わかりやすく話されていた。私も、注意深くその話しに耳を傾けていた。

この日は、地元の歴史に詳しい元教育者の本間陽一氏を、訪問することにもなっていた。雨が少しだけ上がり始めた頃、お宅に着いた。本間氏は、おだやかな面差しで、私達を出迎えてくださり、測量に使用した船の大きさや、忠敬が逗留した家の御子孫のことや、山北町の人々の親切な対応のことなど、資料を広げながら、わかりやすく話してくださいました。さらに、本間氏の話は、忠敬だけに留まら

ず『唐爺や』と呼ばれていた人物のことも及んだ。『唐爺や』とは、十代の時、出漁中、嵐に遭い遭難。漂流している時にアメリカの船に助けられ、その後、長い年月を経て幕末の混乱期に日本に戻ってきた、山北町出身の人のことなのだ（明治四三年八十歳で死去）。有名なジョン万次郎と同じような経験をした人が、越後にも生きていたのだ。私は、この日、教科書には載っていない歴史上人物を知る機会を得たのだった。

お話を伺っているうちに、外の雨は、すっかり上がっていた。三人は帰路についた。

六月十二日、神田さんが書かれた、伊能忠敬の測量行脚の記事が、糸魚川事件のこともありまぜて、新潟日報紙面に掲載された。

新潟県内の道を過去に通過した人物や事物を、時空を超えて紹介するもので、伊能忠敬は、シリーズ十番目の登場となった。記事には、笹川流れの美しい風景の写真が、添えられている。

私は、忠敬も感動したその笹川流れを、また訪ねたいと思った。

（やまうら さちよ・三条市）

道

時空を超えて 10

伊能忠敬の測量行脚

伊能測量隊の軌跡

第3次測量（1802年）
旅行距離（海上含まず）1701km

第4次測量（1803年）
旅行距離（海上含まず）2177km



〔忠敬と伊能図（伊能忠敬研究会編）参照〕

奇岩奇石が日本海の波間に漂つ、沖合に要島を臨む山北町「笹川流れ」。全国測量を続ける伊能忠敬（一八一八年没）は、越後路の旅を最勝の地からスタートさせた。一八〇二（享和）年十月十一日のことである。

このときの測量隊は妻子秀蔵をはじめ七人編成。「人生五十年」といわれた時代、「一日十、二十」の行程と起伏

奇岩奇石が日本海の波間に漂つ、沖合に要島を臨む山北町「笹川流れ」。全国測量を続ける伊能忠敬（一八一八年没）は、越後路の旅を最勝の地からスタートさせた。一八〇二（享和）年十月十一日のことである。

このときの測量隊は妻子秀蔵をはじめ七人編成。「人生五十年」といわれた時代、「一日十、二十」の行程と起伏

心休ませた無類の絶景

現地との摩擦で辞意も

わせ持つ」といわれる名勝である。船上からの眺めを忠敬は「奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、絶景無類なり」と絶賛している。

国道345号沿い。幕末の志士、頼三樹三郎の碑がある



眼鏡岩海岸あたりだろうか。は「無類」という言葉に実感がこもっている。

笹川流れでは、人々の振舞いにも感謝している。測量隊のため、板貝から笹川地区

魚川事件」である。

国会図書館所蔵の伊能図大図のうちの1枚（柏書房）。日本海に浮かぶ粟島のほか、寒川村、脇川村などの地名が記されている

第十次にわたる測量で、本県には二度入っているが、事件は笹川流れを南下した第三次測量の翌一八〇三年、第四次の最中に起きた。「伊能忠敬の糸魚川事件」の著者、小野習司さん（糸魚川市）によると、おまの経緯はこうだ。

糸魚川に入った一行に現地の役人が「姫川は急流で河口は渡れない」と断った。しかし実際には河口は容易に渡れたことから、忠敬にはあれらが妨害と映り、「これほど粗末な扱いを受けたことはない。江戸にて申し立てる」と言ったとされる。だが、糸魚川領主が「不行き届きの事実はない」として、逆に幕府勘定奉行に訴え、騒ぎが広がっていった。

国の天然記念物に指定されている山北町「笹川流れ」の眼鏡岩海岸付近。伊能忠敬が「無類の絶景」と褒めたたたえた奇岩や白砂が、200年前と変わらぬたたずまいを見せている
＝写真部・佐藤隆撮影



【メモ】伊能忠敬(1745—1818)。江戸時代後期の測量家。上総国小関村(現千葉県九十九里町)で生まれた。18歳で同県佐原市の伊能家に婿養子となり、酒造・米取引で家業を挽回(ばんかい)。50歳で隠居した後、幕府天文学方の高橋至時(しげとき)入門し、天文暦学を学ぶ。師匠でもある至時の運命的な出会いが、後の地図づくりに大きな影響を及ぼす。56歳から始めた全国測量は1800年の蝦夷地を皮切りに1816年まで続けた。「大日本沿海輿地全図」

のまとめに取りかかる最中に死亡したが、その死は地図が完成する3年後まで伏せられていたという。伊能図がドイツ人医師のシーボルトの手に渡った世にいう「シーボルト事件」は1828年に発覚している。

【参考文献】佐々間達夫「伊能忠敬測量日記」、渡辺一郎「伊能忠敬の歩いた日本(ハル野智)」、伊能忠敬の系魚川事件、伊能忠敬研究会「忠敬と伊能図」、風間広吉「伊能忠敬第三次測量における越後国岩船郡沿海測量について」ほか

に至る山道を補修し、新道をつくって来ていたのだ。お触れが出ていたとはいえず、お盆休み返上の作業だったようだ。大難所を気持ち良く通過できたことに、日記では村々の人品古風にして純朴(じゅんぱく)・村々貞実の徳ならんと感じけり」と二度にわたって褒めたたえている。

「測量日記は作業日報的な性格が強く、地元の対応をいれぼ(丁寧)に記述している例はほとんどないといわれている。よほど印象が良かったんでしょ?」。「伊能忠敬研究会新潟支部」の垣見壮一さん(71)新潟市は興味深そうに話す。

忠敬は一八一六年、三万五千*に及ぶ全国踏破を全うする。「地球の大きさを知らたい」「日本を測る」という夢と好奇心を道連れに、足かけ十七年の偉業だった。このうち、越後路の測量に要したのは延べ七十三日。道のりは全行程の一部にすぎないが、「偉業を支えたのは伊能隊が通過した地方の住民の協力も大きかった」と、垣見さんは振り返る。

しかし、絶えず順風の中にいたわけではなかった。いくつかの摩擦も起きている。その象徴といわれるのが「系不思議」。

「次回(は)『親鸞ゆかりの七』

測量が地方にはほとんど理解されない時代である。真偽は不明だが、小野さんは情報不足に加え、「忠敬らの行動が、領地や石高を調べる『検地』ではないかと誤解を与えた」と推察する。

笹川流れとは対照的な対応やその後の展開に忠敬は困惑したのか、天文学の師匠高橋至時(しげとき)にあてた手紙には、「測量御用御手伝の儀は御容捨てされ……と辞意ともとれる記述がある。言葉通り、ここで中断していたら、歴史はどう回っていたらう。

越後路を歩いた第四次測量を境に態勢も一変する。忠敬の成果を目にした第十一代將軍家斉は精巧さに息をのんだという。幕府は直ちに日本全土の地図作製を命じた。ポラントニア的扱いから一転、国家プロジェクトに格付けされたのである。

実測による初の日本地図「大日本沿海輿地全図」が完成したのは一八二二年、忠敬の死後三年だった。病や体力の衰えと闘い、隠居後の第二の人生にかけた男の挑戦。その魅力に引かれ、足跡をたどる旅に出る人は、今も少なくないという。

「次回(は)『親鸞ゆかりの七』

測量が地方にはほとんど理解されない時代である。真偽は不明だが、小野さんは情報不足に加え、「忠敬らの行動が、領地や石高を調べる『検地』ではないかと誤解を与えた」と推察する。

『旌門金鏡類録』 (八)

小島 一仁

享和大洪水のことなど

前回は享和元年(一八〇一)の門訴未遂事件について記したが、『金鏡類録』第四冊の後半には、それにつづいて、享和二年に大洪水があったことが記されている。この年、六月上旬から日照りが続き、旱損になるのではないかと心配されていたが、六月二十八日から、一転して、昼夜大雨が降り続き、江戸近在では大洪水となつて、江戸永代橋などが流失した。利根川筋でも、何か所か堤が切れたが、佐原村では、本田新田ともに水当りが強く、村役人たちは昼夜出勤して水防につとめた。七月中に、地頭所の役人が廻村し、八月になると、代官滝川小右衛門の手代が新田検見のために廻村に來た。このとき、代官手代から、伊能三郎右衛門と永沢治郎右衛門に対して、「公儀から扶食と種の貸付がある筈だが、諸方の事で、なかなか行き届かぬので、両名で、金三百兩用立ててほしい」という申し入れがあった。しかし、両家は「近年甚だ不商内で損毛仕り」としてこれを断り、その後、金百五十兩用立の申し入れがあったが、それも断つた。

八月二九日、年番名主彦作らが地頭所へ出頭した。そのとき、たま

たま、自分(景敬)も在府中であつたので同行し、年貢の引方を願つたところ、米四百俵を下された。

そして、この件は、次のような記述で結ばれている。

「近年は、毎日、朝から暮まで一人白米一合程づつ施してきたが、午(寛政十年・一七九八)の夏から年々米値段が高くなつてきたため、乞食非人がおびただしく、普通の日でも白米四、五升づつ差し遣してきた。しかし、この節からそれを減じ、村内本田・新田の貧窮人へは是までの通り絶えず合力を施し、村内はもちろん、近郷の類焼の者へは火事見舞と名付けて見届けてやるようにし、組内で御年貢や村入用を納め兼ねる者には取りはからいをしてやるようにしている。」

お上からの用立金は断つても、近隣の困窮者への施しは、絶えず続けていくということであらうか。

名主伊能三治郎

文化五^辰年(一八〇八)閏六月二五日、滝川小右衛門代官所から、村次順達の触書が到着した。

「前々から忠孝奇特により、公儀から褒美を下された者をもれなく調べ、褒美を下された年月、その名、年齢、行状を書き記して、当月末までに申し出るように」ということであつた。

佐原村からは、まず、宝永二年褒美の名主勘解由三十八歳(伊能景利)、享和元年の百姓伊能三郎右衛門三十六歳(景敬)、と同人父伊能勘解由(忠敬)の名があげられ、その行状もくわしくのべられているが、それは前に箱訴の件で記したことと同様なので省略する。次に、

明和三年（一七六六）褒美の百姓仁兵衛六十四歳（永沢帆景）と宝暦八年（一七五八）の百姓永沢治郎右衛門（征俊）、明和三年の其の子永沢治郎右衛門（俊順）の三名が凶作に際して困窮人を救った行状が記されており、特に永沢征俊については、佐原浄国寺の永沢家墓地内に建てられた顕彰碑の碑文をのせている。「了玄翁済貧恤窮紀略」と題して儒者亀田鵬斎（かめだぼうさい・一七五二—一八二六）が記したものである。

ところで、この「忠孝奇特」の者についての記述を読んで、小さなことではあるが、はじめて気づいたことが一つある。このとき、代官所への報告書の差出人が、「名主伊能三治郎」となっていることである。この三治郎というのは、景敬の長男三治郎忠誨のことである。

「名主三治郎幼年三付代、元名主半十郎」と記されているところもある。三治郎忠誨は文化三年（一八〇六）の生れであるから、この時、数え年で三歳であった。門訴事件のとき名主であった半十郎（半重郎）らが退役した後、名主として適当な人物が見つからなかったたのである。三治郎の父景敬は、家督をついだ時から、名主より上座の村方後見の役についていた。それで、おそらく、やむをえず、三治郎を形式的に名主ということにしたのであろう。

わたしは、忠誨が、少年時代から暦学修業のために江戸に出ていたので、村政とは全く関係がなかったとばかり思っていたのだが、今回『金鏡類録』を読みかえして、はじめて、形式的とはいえ、彼が名主とされていたことに気づいたのである。

「伊能家系年譜」

『金鏡類録』第四冊の最後は、「伊能家系年譜」という記録によってしめくくられている。伊能家には『家牒』という先祖書があるが、この「家系年譜」も先祖書である。この二つの先祖書は、内容でも書き方でも、かなりのちがいがある。

『家牒』は、前に本誌第二十六号（二〇〇一年七月）で記したように、墨付紙八〇枚ほどの記録で、先祖から江戸時代のことばかりでなく、近代に入って、「十五代目伊能康之助」までのことを記している。このうち、江戸時代に書かれたのは、形式上からいえば「七代目昌雄」のところまでで、「八代目家慶」（忠敬は「十代目」とされている。）以後のことは、康之助氏室の多嘉子さんが『金鏡類録』等を参考にしつゝ一九二〇年代以後に書き記したものである。

「伊能家系年譜」の方は、墨付紙二五枚ほどで、記述は文化六年（一八〇九）八月に、忠敬が九州測量に出発したところまででおわっている。『家牒』にくらべて「家系年譜」の紙数がはるかに少ないのは、忠敬以後、幕末から近代にかけての記述がなされていないためというよりは、むしろ、先祖書として、整理した書き方がされているためと思われる。『家牒』の方は、幕臣から来た書状の写しを何通ものせていたり、「矢作領村附之事」、「勘解由持反別之覚」、「伊能壹岐隠居地」、「伊能三郎右衛門昌雄死去之節田畑屋鋪持反別之覚」などの記述に多くの紙数を費しているのだが、「家系年譜」の方は、そのような記述は、すべて省いている。

文字の書き方は、『家牒』は普通の行書体で書かれているが、「家系年譜」は、楷書の漢字と片仮名を用いている。左に、その書き出しの部分だけを掲げておこう。

本姓藤原氏

世々大和國高市郡
西田郷

平城天皇ノ勅ヲ

蒙り大同二年丁未九月十日下午總國香取郡大須

賀莊ニ下向シ伊能村ニ住ス始テ伊能ヲ以テ氏

トシ其地ニ春日明神ヲ勧請シ氏族ノ鎮神トナシ

大須賀明神卜号乃伊能氏神職ヲ兼下ニ評也景能无卜生東

平ノ一族タリ故ニ或ハ平姓ヲ稱ス果能

三子孫世々伊能ニ属リ大須賀莊ヲ領ス景宗

さて、前に『金鏡類録』全体の編集者は、忠敬の長男の景敬である
と書いておいたが、この「伊能家系年譜」の作者は、景敬ではなくて
忠敬である。そのことは、文化七年（一一一〇）五月に、景敬が「林
大学頭様御用人中」にあてて記した書状の写しがここに載っているこ
とによつてたしかめることができる。

以下の通りである。

一筆談在公暗々時長沙府爲家
系酒樓蓋印機

[illegible]

八月廿一日

伊能之君大正

(宛名用人氏名四人省略)

○解説文

一同七午年五月廿一日親勘解由去已八月中九州測量御用
 出立之節申置候^二付、林大学頭様御用人中^江向伊能家系
 年譜為差登候節相添候書状之写

一筆啓上仕候、向暑之時節^二御座候得共、祭酒様益御機
 嫌能被遊御座珍重之御儀奉存候、次^二各様愈御安
 泰^二被成御座珍重之御儀奉存候、然者先達^而同苗勘解由
 祭酒様^江先祖より歷世御文章御願申上候^二付、去秋
 中御用^二而九州発足之節も先祖行歴之記差上候様
 私^江申付置、猶又当春御用先より右之趣申来候間
 今般差上申候、勿論右行歴之記は同苗致筆記
 置候^江私儀注杯^江聊之加筆仕甚瑣屑之事共
 有之候を其^二而清書仕奉入^而御高覧候儀何共
 奉忍入候御儀に御座候得共、私家之分際別段是と申
 擇分可申上盛奉も無之事^二候間右之^二而奉差上候、可
 然御被露奉願候、尚同苗儀当喜坎来正月迄^二は
 帰府可仕様^二御座候得ば何卒当暮迄^二御作文被下
 置候様御願申上度奉存候、此等之段期限申上相願候
 儀重々恐多奉存候得共可相成候ハ、右様御出来被下
 置候様御執成奉願上候、右之趣亘敷御披露被成下度
 奉希候、右御頼申上度如斯^二御座候、恐惶謹言

五月廿一日

伊能三郎右衛門

この書状によると、忠敬は、文化六年八月中、九州測量に出席するに際して、景敬に対して、「先祖行歴之記」を「祭酒様」（林大学頭）に提出して文章を見てもらうように命じたものである。そして「右行歴之記は同苗致筆記置候^二、私儀注杯に聊之加筆仕」とある。ここで「先祖行歴之記」といつているのは「伊能家系年譜」であることは明らかであるし、これを忠敬が書き、それに景敬が少しばかり加筆したものであるというのである。

なお『金鏡類録』全体が景敬の編集によるものであるということは、第二冊から三、四冊にかけて「我等」という一人称がしばしば出てくるが、それはみな景敬をさしていること、また、「父勘解由」「親勘解由」などという書き方もよく出てくること、それに、第四冊の門訴事件のように、景敬以外の者には書ける筈のないことが出てくることなどで明らかであるが、その上に、「伊能家系年譜」で忠敬が書いた文章に景敬が加筆したということは、彼が『金鏡類録』の主たる編集者であることを物語っているのである。

最初の忠敬伝

「伊能家系年譜」は、先祖書として、かなりととのった書き方になっているが、佐原初代の景久から忠敬までの十人の当主のうち、忠敬のところは全体の約四分の一の紙数（四〇〇字詰で約五枚）があらわれている。編集者の景敬が忠敬より先に死去してしまったため、『金鏡類録』の記述自体が打ち切りとなり、忠敬のことも、九州測量のところで終りとなっている。しかし、それでも、これは、最初の忠敬伝といつてよいであろう。この最初の忠敬伝は、忠敬自身が書いたもので

もあるから、次に紹介しておきたい。

忠敬が隠居して江戸に出るまでの部分を、原文に振仮名や句読点などをに入れて、読みやすいようにして書くことにする。括弧内に書いたのは細字の部分である。

忠敬 称三郎右衛門、後号勘解由。長由嗣、実ハ上総国武射郡小堤村神保貞恒ノ男（貞恒称利左衛門、神保氏足利ノ末乱世ノ節右小堤ノ砦ニ在シ神保称長門守泰宗ノ裔ナリ）、長由ノ女ニ配シ伊能ノ家ヲ嗣ク。長由不幸ニシテ世ヲ蚤クシ、一女漸二歳、兄昌雄ノ遺命ニヨリ南中村平山秀暁ノ家ニ養ハル。宝暦四戌年四月二十八日看防伊能清茂死去ニヨリ、其秋母子トモニ家ニ帰ル。女年十四歳。翌五亥年、清茂ノ男景茂ヲ迎テ家ヲ継シム。同七丑年六月廿五日景茂死ス、年十九。于時一子胎孕ニアリ。冬ニ至テ生ル。称三太郎、号忠孝（同十三末年九月七日死、歳七）。同十二年十一月、貞恒ノ男某伊能家ニテ迎エシニヨリ平山季忠（平山秀暁ノ嫡子也、称藤右衛門）ニ介シテ御先代祭酒鳳谷公ヘ入門シ、実名忠敬ト賜ハル（鳳谷公御父子君ヨリ被下シ詩章詩序并ニ画讃有之）。同十二月伊能ノ家ヲ嗣ギ、長由ノ女ニ配ス。忠敬看防ノ後ヲ受ケ父祖ノ業ヲ継ギ名主後見タリ。于時歳十八、分家伊能豊秋扶輔ス（伊能七兵衛某四世、称伊能七郎右衛門）。此時、家産或ハ減ゼントス。忠敬志ヲ励シ業ヲ勤メ日夜不怠、俟素ヲ主トシ家事ヲ専ラニシ、復興ノ功ヲ立シ事ヲ欲シ、先祖ノ志業ヲ守リ恩恵利沢ヲ忘レサラシ事ヲ常々心掛ケ、村方為ヲ存シ小民ノ救ニ成ルベキ事ヲ励ミ、殊ニ天明三卯年同六年、関東大飢饉、米穀高直ニテ諸人窮厄ニ

及ヒ所々強暴ノ愁アリシニ、忠敬、上方ヨリ米穀ヲ買入レ、価ヲ減シテ是ヲ売り且ツ村内近里ノ窮民ニ施シヲ与ヘシ故、強暴ノ愁ナク事穩ニ治レリ（既ニ地頭所ヨリモ褒メ賜ハリモノアリ）。是只、祖先ノ業ヲ守ラント欲スルノ故ナリ。安永七戌年六月、佐原村本田民家ヘ新田ノ内ヲ加ヘ御料御代官所ヨリ御側津田日向守知行所トナリ、於地頭所天明元丑年八月更ニ名主トシテ主宰セシメ、同三卯年九月、苗字旅行帯刀ヲ許シ、同四辰年八月改メテ村方後見トシ村役ノ上ニ居リ、令指揮。其後地頭所山城守代ニ至リ三人扶持ヲ賜フ。同三卯年十二月廿九日、忠敬妻死ス、年四十三（長由ノ女、嫡子景敬ノ母也。母ヘ至孝貞節ニシテ能ク家事ヲ輔ケリ。忠敬復寛政二戌年六月仙台家ノ藩医桑原氏ノ長女ヲ娶リテ妻トス。寛政七卯年三月十四日死ス）。寛政六寅年十二月地頭所工隠居相願ヒ、嫡子景敬エ家督ヲ譲ル。願ノ如ク後見役免シ隠居一人扶持ヲ給ハル。同八辰年七月、地頭所ヨリ嫡子景敬（称三郎右衛門）ヲ村方後見トシ三人扶持給ハリシ節、隠居一人扶持ヲ辞ス（景敬地頭所ヨリ去ル同七卯年二月苗字旅行帯刀ヲ許サル）。忠敬（勘解由）兼テ天文曆学ヲ好ミ世ヲ避ケシ後弥々相励ミ、適改曆ノ時ニ当リ故高橋作左衛門ドノ其選ニ預リ高名ノ事ヲ聞キ、其門ヲ叩テ自ラ学フ処ヲ相正ス。（以下略）

右に書かれていることは、忠敬に関心をもっておられる方々は、たいてい御存知のことばかりのようであるが、一つだけ書きとめておきたいことがある。

天明の飢饉のとき、忠敬が多額の施与をして貧民を救ったことは、多くの忠敬伝に記されているが、それは、忠敬が同情心の厚い人であったことを示すような書き方になっている。だが、忠敬が行った施与合力の主要な目的は、打ちこわしを防ぐことにあった。忠敬は、打ちこわしを防ぐには、役人の力でおさえてもらうよりも、困窮者に施与した方が効果的であると考えたのである。このことは、本誌第三六号で説明しておいたが、ここでまた、「米穀高直ニテ諸人窮厄ニ及ビ所々強暴ノ愁アリシニ、忠敬上方より米穀ヲ買入レ、価ヲ減シテ是ヲ売リ且ツ村内近里ノ窮民ニ施シヲ与ヘシ故、強暴ノ愁ナク事穩ニ治レリ」と記されているのである。小さな事のようにだが、このことは、忠敬の商人的合理精神に関することなので、やはり、見落すことはできないと思う。

なお、先祖書というものは、主として代々の当主のことを記し、その家族、とりわけ、女性については、ほとんど書かないのが普通のようである。「伊能家系年譜」も同様なのであるが、忠敬のところに限って、先代長由の妻（妻ミチの母）の行状が、欄外にはあるが、細字で、かなりくわしく記されている。

彼女は、南中村（多古町南中）の平山氏の娘であった。平山氏は、熱烈な日蓮宗信仰の家であったので、彼女は、伊能家に入ってから、生涯、日蓮宗を守り通した。夫の長由の病中に、伊能家の仏壇（真言宗）とは別に、自分で日蓮宗の仏壇をかざり、わざわざ、南中村から日蓮宗の僧侶を呼んで祈祷してもらったこともあった。長由の兄昌雄は彼女の行動を許しておくことができず、一時は、離別することも考えた。そして、離別は思いとどまったが、死去する前に、今後、伊能家の中で日蓮宗を信仰することを禁止するというのを遺命した。

ところが、忠敬が伊能家に入夫したばかりの時には、彼女は、伊能家の婦人をことごとく日蓮宗に改宗させようとしていたという。

忠敬家督初メノ事ニテ、其宗門ヲ建ントスレハ昌雄の遺命ニ背キ、建テザラントスレハ母ノ志ヲ拆ク、進退甚タ窮セリケレトモ、専ラ丹心以テ母ノ心ヲ慰メ、漸ク婦人日蓮宗ノ事ヲ相休ム、故長由妻、安永三年十一月廿三日死ス、年五十二

忠敬も、彼女の行動には、よほど悩まされたらしい。そのために、わざわざ、彼女のことを書き残したのであろう。

（こじま いちじん・忠敬研究家、浄国寺院主）

筆者からのお便り

これまで取り上げてきた諸文献は、すべて、伊能忠敬研究に関して、必読のものです。実際に、これらの文献を読んだ人はごく少数でしょう。その意味で私の拙い解説も無駄ではなかったかと思っています。

ここで一区切となりますので、ひと休みさせていただきます。いろいろとご配慮ありがとうございます。



編集部 ご体調を回復のうえ、早い機会に再開をお待ちしております。

伊能家文書紹介 五

測量隊員たちが残したもの

B 一二四 伊能妙薫宛 尾形謙二郎書簡

文化一〇年五月二四日

安藤 由紀子

〔原文〕 (前略)

尊師御初、皆々一同無事ニ
御用相勤申候間、乍憚御安
意可被下候。然は、肥後國より
薩摩差入之時、付廻り役人、
留守居添役並助三人、足
輕、用聞人足ヲ引連れ
國界迄出迎候處、何とも嚴
重ニ候間、大ニ恐申候。夫より追日ニ
懇意相成申候て、一先安堵
仕候。去三月三日二鹿兒島へ
到着仕り、嶋渡仕度ニ、五六日
逗留致し、
(つづく)

〔釈文〕 (前略)

尊師御初、皆々一同無事ニ
御用相勤申候間、乍憚御安
意可被下候。然は、肥後國より
薩摩差入之時、付廻り役人、
留守居添役並助三人、足
輕、用聞人足ヲ引連れ
國界迄出迎候處、何とも嚴
重ニ候間、大ニ恐申候。夫より追日ニ
懇意相成申候て、一先安堵
仕候。去三月三日二鹿兒島へ
到着仕り、嶋渡仕度ニ、五六日
逗留致し、
(つづく)

〔口語文〕 (前略)

尊師(隊員たちはみな、忠敬をこう呼んでいた)初め皆々一同、無
事に御用を勤めておりますから、ご安心ください。

さて、肥後國から薩摩へ入りましたときは、付回り役人として、「留
守居添え役」とその補佐役が三人、足輕や用聞き人足を引き連れ、國
境まで出迎えに來たのですが、なんとも嚴重な構えでしたので、たい
へん恐ろしく思われました。しかしだんだん日がたつにつれて、おた
がいに懇意になりましたので、一先ずほつといたしました。

去る三月三日(前年、文化九年)鹿兒島城下に到着、二島(種子島
と屋久島)へ渡る仕度のため五、六日逗留しました。(つづく)

これから数回にわたって、測量隊員たちが記録したものを紹介していくことにしたい。

これらの記録は伊能家に私蔵されていたからこそ、今まで残ってきたものであった。無名の下働きの隊員たちの手紙など、文化財保護委員の役人の目には留まらなかったから、「重要文化財」の指定からまれて、伊能家の行李に眠っていたのである。

隊員の有能なトップであり、福江島（現、五島市福江）で客死した坂部貞兵衛の哀切な生涯については、八号から一一号まで四回にわたって述べてきたので、ここでは触れない。彼の死を心をこめて看取ってくれた福江藩に感謝して、その書状一通は、伊能家から「五島観光歴史資料館」に寄贈された。お墓もあることだし、この島の方がすわりがよさそうに思われたからである。

一九九八年、江戸東京博物館で行われた、「忠敬と伊能図」展の片隅に、この書簡がキャプション付きで並べられたのを見たとき、伊能陽子さんと、「今夜は乾杯しなきゃね」と手を打ち合ったのを思い出す。

徳光仏峠「え

「薩摩という国は、豊臣政権も徳川政権も、そして太政官政権になつてからも、権力は終始これを不気味に思い、お世辞笑いのひとつもしなければならぬ独立性の強い軍事国家であった。」

「江戸体制が強固であった時代でさえ、頑なに境をとざし、『薩摩飛脚』といわれた幕府の密偵が入ってくると、容赦なくこれを斬ったという恐るべき国境であった。」司馬遼太郎の『街道をゆく』にはこう書かれている。



測量隊の二度目の薩摩入りは、文化九年二月二十六日で、肥後の水俣から薩摩の大口にいたる、今の国道二六八号線をたどった。

地図に名前が載っていないので、先日熊本県立図書館のホームページから質問したところ、『以前は「徳光仏山」とよばれたなだらかな峠であったが、文政元年に頼山陽がここを通ったとき、その詩で「亀嶺」と詠ったので、以後「亀嶺」とよぶようになった。文化九年に伊能忠敬が通ったのなら、まだそのときは、「徳光仏山」だっただろう』と

のお返事をいただいた。〔注〕

肥後から薩摩へというところが、また怖いのである。上代以来両国は、それぞれともに武を誇り、ともに独特の文化を積み上げ、ともに中央政権が誕生することに反乱を起こしていた。維新後も、熊本城下において神風連の乱をおこし、薩摩は西郷隆盛を総帥として西南戦争を戦った。

古来図式もきまつていて、中央政権は、まず肥後をたたき、ここを基地として薩摩を屈服させようとしてきた。薩摩には「肥後の加藤（清正）が来たならば・・・」という古謡があるくらいで、恨みが深いのである。

測量隊の二度目の薩摩入りの様子を伝えるこの手紙からは、淡々とはあるが、隊員の緊張があらのままに伝わってくる。

中央政権の力は弱まりを見せ始め、それにつれて雄藩の力は相対的に強まりつつあった。文化文政期のその危うい均衡の時代に、伊能忠敬の九州測量は行われたのである。幕府の威令は、全国にまだちゃんと行き届いていたし、かといって薩摩も、さほど中央を恐れる必要はなくなっていた。

薩摩では、藩主は孫の斉興なりおきがあとを継いだばかりだったが、先代の隠居かくのふ齊宣も元気、先々代のやり手の大隠居、島津重豪も相変わらず派手好みで、隠居が二人もいた。

大隠居の重豪は画策のすえ、長女茂姫を十一代將軍家斉の正室としていて、將軍の岳父として幕府に大きな影響力を持ち、琉球などを通じて多額の密貿易をおこないながら、これを容認させていた。この手紙に書かれた、測量隊の二度目の薩摩入りのころは六八歳、奇しくも忠敬と同じ年であった。藩の実権をいまだに握っていたうえ、好奇心が強く、浪費家で、藩は当時数百万両の借金をかかえていたという。

藩庁は、財政難の只中にもかかわらず、將軍の外戚としての体面上、幕府にたいして恥をかうてはならぬという強い脅迫観念を持っていた。こうした微妙なバランスの中で、二回にわたる、九州滞在の実質合計が二年八ヶ月という、長期の伊能測量が行われた。忠敬はともかく、隊員たちは、薩摩入りのときはたいへん緊張し恐れ、薩摩の役人側も精いっぱい気を使い、かつ失敗を恐れていた。

「徳光仏峠」に現れた薩摩の一行は、国境見回りのときのように、多分武装していたであろう。「何とも嚴重二候間」という文面から、推察できる。

二月二六日の忠敬の「測量日記」には、例によって冷静に、事実だけが綴られている。

「朝より晴れ・・・肥後国芦北郡・薩摩国伊佐郡国郡領界、久木野より一里一一町五八間、それより薩州領（国境まで肥後の付廻り人三名が送ってきて帰る）・・・薩州留守居添役平田次郎八、外、椎原与三治、東郷八右衛門出迎、それより薩州領内案内」

最初の薩摩入り

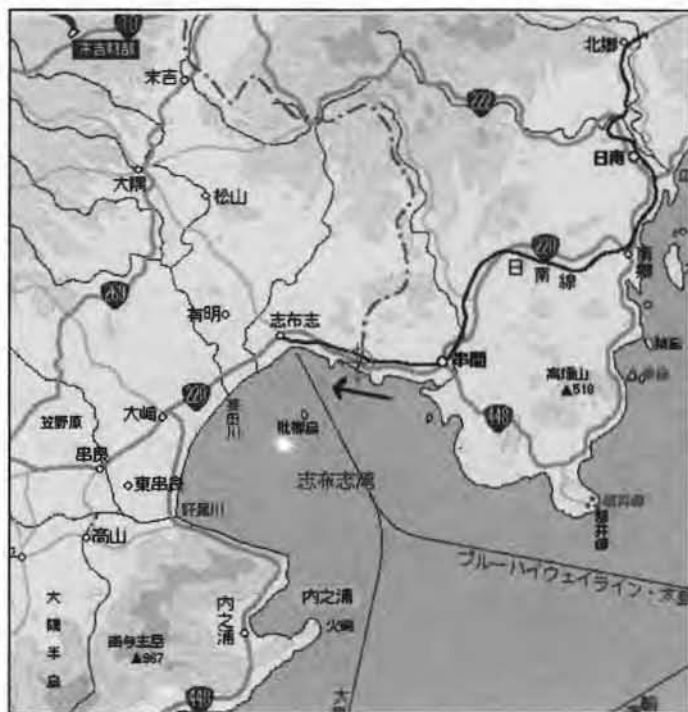
前後するが、最初の薩摩入りはどんな様子だったのだろうか。

二年前の文化七年五月八日、このときは海辺で、志布志湾を東から西へ入国した。朝から曇りのなか日向国高鍋藩の今町出立、一〇時ごろから大雨になる。高鍋藩福島ふくしまの代官一人と、絵師や用足し人足たちは、途中で「本当は、鹿児島領の志布志村までお送りするところですが、薩摩領は出入りが難しいので・・・」と言い訳けして帰ってしまった。

二回目の山中と違って、ここは海辺で明るい。測量隊一行は、このときは何も心配していなかった。

じつは、領内の付け廻り役の総責任者、「留守居付役」の薩摩藩士、野元嘉三次とは顔見知りであった。つい一ヶ月ほど前の四月六日、延岡城下の宿へ様子を見に訪ねてきてくれて会っており、彼が国境まで迎えに来ることをすでに知っていたからである。

一行が、種子島・屋久島両島をも測量するつもりと知った薩摩藩と種子島家では、巨額の借金を抱えた身ではとても対応しきれないと、



野元嘉三次を測量中の忠敬のもとに出向かせて、かなり早くから中止の交渉をさせていた。

野元嘉三次は、九州測量が二回に分けられたとき、いったん江戸へ帰った忠敬を追いかけように入府し、自宅まで訪ねてきて中止の交渉をしたのだった。結局この願いは幕府によって聞き届けられなかったが、忠敬と測量隊一同は、野元の人柄をよく知り、その願いにも同情的だったようにみえる。先に述べた二度目の峠越えのときは、野元さんの顔が見えず、いつそう不安が募ったのだろう。

文化七年五月八日の「測量日記」は、次のようである。「朝六時、日向高鍋領今町出立、大曇天……一〇時頃より大雨……海岸大難所……(高鍋領役人一同は、前述のように途中で帰る)……領界へ野元嘉三次・岩山雲八出迎え、雨中小船に乗り、志布志町に着……」

志布志の宿では野元さんから、全国に名の知れた、国産の泡盛と国分のきざみ煙草をもらい、それぞれに分配した。始めの挨拶として、手厚い贈り物を受けたのだった。

間もなく小者たちは、薩摩側の同輩とすつかりうちとけた。二年後の薩摩入りの時も、緊張しなかったのは、小者たちだけだったらしい。この最初の時に見知った顔を、あちこちに見付けたからである。

隊員の格付け

これから、隊員の書いたものを紹介していくので、彼らのそれぞれの格付けについて、説明が必要だろう。

そこは江戸時代のこと、右の贈り物にしてもそれに従って、ちゃんと分相応にもらっている。

伊能隊長と坂部副隊長には、泡盛一壺ずつと国分の刻み煙草が二包ずつ、天文方下役と内弟子には煙草一包ずつ、侍と小者には全部で、

煙草二包という具合である。内弟子の誰かが、侍と小者を前にして、二包みの煙草をばらして、八人分に「配分」している様子を想像するとおかしい。

また下役三人は、天文方の役人で、れっきとした武士だから、武士ではない忠敬の内弟子三人と同じ一包ずつでは、大いに不満だったにちがいない。

薩摩藩では、一行がどのような格の人々で構成されているか、慎重に下調べをした。「垂城録」という現地資料には、「伊能勘解由こと、下総百姓の子にて天文にて立身、いまのところ御家人とのことだが、実際は御家人より格は上とのこと、坂部貞兵衛は天文方役人で与力格の由、下河辺・青木・永井ら下役は同心格の由」とあり、麻上下など服装も含めた挨拶の仕方、贈り物の格の付け方など、藩庁より現地へ細かい指示があったらしい。

普通小者たちは、一行の中に名を連ねてもらえない。名ばかりか、人数もはつきりしないことが多い。ただ文化八年から十一年までの、二回目の九州測量のときだけは、種子島・屋久島に渡る大きな船に乗らなければならないので、たぶん現在と同じ理由で、乗船名簿が必要だった。それで小者たちの名前が残っていて、測量隊の全容が分かるのである。

それによって、格の降順に隊員の一覧表を書いてみる。(幕吏の場合は、天文方へ出向以前の役職も加え、あとで出てくる人もいるので、格に番号をふつておく)

1 天文方手付

伊能勘解由 (小普請組)

小者三人付き

2 天文方手付、手伝 坂部貞兵衛 (御先手同心)

小者二人付き

3 天文方手付、下役 永井甚左衛門 (大御番、小笠原備後守付同心)

今泉又兵衛 (御書院番同心)

門谷清次郎 (御細工所同心)

各小者一人付き

4 伊能勘解由、内弟子

尾形謙二郎 (この手紙の差出人)

箱田良助

保木敬藏

久保木佐右衛門

加藤嘉平次

宮野善藏

笠原三之助

5 侍

6 小者

(竿取)

佐助

甚七

(僕)

左兵衛

清助

友吉

新八

弥兵衛

計一九名

侍、というのは、文字通り侍る者の意で、渡り奉公の若党・中間をさし、年俸が三両一分であったことから「三一侍」という蔑称もあるが、一応苗字を持っている。のちほどその書簡を紹介するが、この三

人のうち、忠敬付の加藤嘉平次は有能であつたらしく、測量士として一人前の仕事が出来た。

〔竿取〕は測量の竿を持って立つている、測量専門の人足で忠敬直
属である。〔僕〕は身の回りの世話をする下男で、「測量日記」では、
〔草履取〕とも書かれている。

侍と僕は、名目上御主人にのみ属していた。坂部貞兵衛付の、侍の三之助と僕の清助などは、途中で主人が亡くなつてしまつたので、先に帰りたいといひ、路銀と手形をもらつて帰してもらつた。彼らは途中で放り出されたのではない。忠敬と江戸の天文方、高橋景保との間に二、三回文通があつて、連絡が行き届いてゐた。景保の忠敬宛書簡に「御文の通り姫路からお帰しの方がよいでしょう。もつとも、二人とも若年ゆゑ、道中相済み、心得違ひなく帰府するよう精々申し聞かせてください」とある。また清助は佐原の出身で、帰府してすぐ景保に、侍奉公したいと申し出てきたので「当方に召抱えの約束をしました」と忠敬へ報告の別便がある。面倒見のよいことである。

内弟子をのぞけば、忠敬の命令一下、全員がサツと動いたのではないようで、天文方の武士に所属しているものは、測量中も、その御主人とセットになつて動いている。

それでも武士以外の、内弟子や小者たちは、箱田良助を除いてほとんど上・下総に関係のある人々で、マネージャーとして、みんなの面倒を見た忠敬の長女伊能妙薫（この手紙の受取人）が中心となつて、集めたらしい。留守宅の妙薫は、人集めから測量の日用雑貨の準備までなし、隊員たちにとっては母親のような存在だった。

測量の土台を支えたのは上総・下総の人たちで、千葉県民は、誇りにしていい。

差出人尾形謙二郎の人物評

「原文」

(中略)

一、下段用介子符、
 一流和熟字、口南、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、
 一百一、
 一百二、
 一百三、
 一百四、
 一百五、
 一百六、
 一百七、
 一百八、
 一百九、
 二百、
 二百一、
 二百二、
 二百三、
 二百四、
 二百五、
 二百六、
 二百七、
 二百八、
 二百九、
 三百、
 三百一、
 三百二、
 三百三、
 三百四、
 三百五、
 三百六、
 三百七、
 三百八、
 三百九、
 四百、
 四百一、
 四百二、
 四百三、
 四百四、
 四百五、
 四百六、
 四百七、
 四百八、
 四百九、
 五百、
 五百一、
 五百二、
 五百三、
 五百四、
 五百五、
 五百六、
 五百七、
 五百八、
 五百九、
 六百、
 六百一、
 六百二、
 六百三、
 六百四、
 六百五、
 六百六、
 六百七、
 六百八、
 六百九、
 七百、
 七百一、
 七百二、
 七百三、
 七百四、
 七百五、
 七百六、
 七百七、
 七百八、
 七百九、
 八百、
 八百一、
 八百二、
 八百三、
 八百四、
 八百五、
 八百六、
 八百七、
 八百八、
 八百九、
 九百、
 九百一、
 九百二、
 九百三、
 九百四、
 九百五、
 九百六、
 九百七、
 九百八、
 九百九、
 一千、
 一千一、
 一千二、
 一千三、
 一千四、
 一千五、
 一千六、
 一千七、
 一千八、
 一千九、
 二千、
 二千一、
 二千二、
 二千三、
 二千四、
 二千五、
 二千六、
 二千七、
 二千八、
 二千九、
 三千、
 三千一、
 三千二、
 三千三、
 三千四、
 三千五、
 三千六、
 三千七、
 三千八、
 三千九、
 四千、
 四千一、
 四千二、
 四千三、
 四千四、
 四千五、
 四千六、
 四千七、
 四千八、
 四千九、
 五千、
 五千一、
 五千二、
 五千三、
 五千四、
 五千五、
 五千六、
 五千七、
 五千八、
 五千九、
 六千、
 六千一、
 六千二、
 六千三、
 六千四、
 六千五、
 六千六、
 六千七、
 六千八、
 六千九、
 七千、
 七千一、
 七千二、
 七千三、
 七千四、
 七千五、
 七千六、
 七千七、
 七千八、
 七千九、
 八千、
 八千一、
 八千二、
 八千三、
 八千四、
 八千五、
 八千六、
 八千七、
 八千八、
 八千九、
 九千、
 九千一、
 九千二、
 九千三、
 九千四、
 九千五、
 九千六、
 九千七、
 九千八、
 九千九、
 一万、
 一万一、
 一万二、
 一万三、
 一万四、
 一万五、
 一万六、
 一万七、
 一万八、
 一万九、
 二万、
 二万一、
 二万二、
 二万三、
 二万四、
 二万五、
 二万六、
 二万七、
 二万八、
 二万九、
 三万、
 三万一、
 三万二、
 三万三、
 三万四、
 三万五、
 三万六、
 三万七、
 三万八、
 三万九、
 四万、
 四万一、
 四万二、
 四万三、
 四万四、
 四万五、
 四万六、
 四万七、
 四万八、
 四万九、
 五万、
 五万一、
 五万二、
 五万三、
 五万四、
 五万五、
 五万六、
 五万七、
 五万八、
 五万九、
 六万、
 六万一、
 六万二、
 六万三、
 六万四、
 六万五、
 六万六、
 六万七、
 六万八、
 六万九、
 七万、
 七万一、
 七万二、
 七万三、
 七万四、
 七万五、
 七万六、
 七万七、
 七万八、
 七万九、
 八万、
 八万一、
 八万二、
 八万三、
 八万四、
 八万五、
 八万六、
 八万七、
 八万八、
 八万九、
 九万、
 九万一、
 九万二、
 九万三、
 九万四、
 九万五、
 九万六、
 九万七、
 九万八、
 九万九、
 十万、
 十一万、
 十二万、
 十三万、
 十四万、
 十五万、
 十六万、
 十七万、
 十八万、
 十九万、
 二十万、
 二十一万、
 二十二万、
 二十三万、
 二十四万、
 二十五万、
 二十六万、
 二十七万、
 二十八万、
 二十九万、
 三十万、
 三十一万、
 三十二万、
 三十三万、
 三十四万、
 三十五万、
 三十六万、
 三十七万、
 三十八万、
 三十九万、
 四十万、
 四十一万、
 四十二万、
 四十三万、
 四十四万、
 四十五万、
 四十六万、
 四十七万、
 四十八万、
 四十九万、
 五十万、
 五十一万、
 五十二万、
 五十三万、
 五十四万、
 五十五万、
 五十六万、
 五十七万、
 五十八万、
 五十九万、
 六十万、
 六十一万、
 六十二万、
 六十三万、
 六十四万、
 六十五万、
 六十六万、
 六十七万、
 六十八万、
 六十九万、
 七十万、
 七十一万、
 七十二万、
 七十三万、
 七十四万、
 七十五万、
 七十六万、
 七十七万、
 七十八万、
 七十九万、
 八十万、
 八十一万、
 八

〔釈文〕

（中略）

一、下役、内弟子、侍、小者等迄も
一統和熟仕り、口論等モ決て
無之候 先御安堵可被下候
一、保木氏モ段々手習れ申候て、
随分御役ニ立申候 乍然、近眼ニ
困り申候 算術モ上達仕り、手
跡モ上り申候 今ハ今泉、門谷
モ余り劣り不申候 其力ワリ
嚴重ニ仕込候間、少々迷惑モ
可有之候 乍然、身為ト思へ、一向
遠慮不仕候
一、嘉平次、思ノ外ノ実義者ニ御座候
善藏モ随分親切ニ勤メ申候
佐右衛門、佐介、已御存之通りニ
御座候 甚七、清兵衛モ能
大切ニ奉公仕り候

〔口語文〕

（中略）

一、下役、内弟子、侍、小者にいたるまで、一同すっかり親しみ合い、
口論になることなど決してありません。先ずご安心ください。
一、保木氏もだんだん手馴れてきて、随分お役に立っています。ただ
近眼にだけは、困っています。算術も上達し、字も上手になりました。
た。今では、今泉や門谷にも劣らないほどです。そのかわり、私が

嚴重に仕込んでおりますので、少々迷惑と想っているかも知れませ
ん。しかし彼の身のためと思つて、まったく遠慮はしていません。
一、嘉平次は、思ひのほか仕事が出来ます。善藏も心をこめて、勤め
ております。佐右衛門も竿取の佐助も、すでにご存知の通りです。
甚七、清兵衛も大切に奉公しています。

差出人の尾形謙二郎は忠敬内弟子のひとりで、名前が何度変わる
不思議な人である。彼の生涯はまだ闇の中だが、そのうち何か分かる
かもしれない。とにかく複雑な家族関係の中で育つたらしい。実父が
当時の和算界の大物、会田算左衛門であること、香取神宮の神官、尾
形平馬の次男として育てられたことの二点だけが、分かっている。
頭書の部分の続き、種子島・屋久島測量の詳細は後回しにして、隊
員の人物評を妙薫に知らせている末尾の部分引用した。

尾形氏は、自分が口をきいて集めた者は、役に立っているかしらと
心配の妙薫を、安心させようと懸命である。

ここに出てくる問題児らしい保木さんは、佐原村の領主、六千石の
大身の旗本津田山城守の家老、渡辺一家の一員で、算術の能力もなく、
悪筆で、忠敬からさんさんの悪評をこうむっている人である。

この時が最初の参加で、ベテランの尾形氏に大分しごかれている様
子がうかがえる。内弟子同士で、鍛え合っているのだ。しごきの結果、
「今ハ今泉、門谷モ余り劣り不申候」と述べ、天文方下役の武士たち
に対抗心を燃やしていることにも注目したい。

伊能家は、当時佐原村で同時進行中の訴訟に巻き込まれていた。策
士でもあつた忠敬は、この件で家老に有利に動いてもらうため、渡辺

家の依頼をうけ入れ、妙薫や長男景敬の反対を押し切って、我慢して問題児を隊員に加えたのだった。忠敬の目論見は当たって、この我慢は、訴訟には大いに役立った。

字も上手になり、お役に立っているようで、この事情を知っていて心を痛めていた妙薫さんには、なよりのニュースだったと思う。彼は、このあとの伊豆測量にも従事し、二度御用を勤めた。(つづく)

〔注〕 熊本県立図書館の御回答によれば、『肥後国誌 下』には、「徳光

仏山水俣ニ在 薩州界木アリ(略) 注曰、徳光仏山ハ薩州の界、

山上ニ、石浮屠(石塔)アリ 徳光仏山ト云銘文消滅、不分明

(略) 肥薩の堺ナレ共、境界分明ニ知ル者ナシト云フ」とある由である。

参考文献

大谷亮吉 「伊能忠敬」

前田 勇 「江戸語の辞典」

司馬遼太郎 「街道をゆく―肥薩のみち」

増村 宏 「伊能忠敬の屋久島種子ヶ島測量」

佐久間達夫 「伊能忠敬 測量日記」

「高橋景保書簡」伊能忠敬記念館蔵 伊能忠敬文書目録 84

熊本県立図書館レファレンス回答

(あんどろ ゆきこ・元国立国会図書館、忠敬文書研究家)

よみうり寸評

東京下町にある富岡八幡宮の鳥居をくぐると、方位磁石をつけた杖を手に、旅の第一歩を踏み出す男の銅像に出会う◆伊能忠敬55歳。ここで道中の無事を祈願した後に、蝦夷地へ向けて最初の測量に出た。日本地図が刻まれた背後の石碑に、旅立ちの日は200年あまり前のきょう、1800年6月11日とある◆日本の精密な実測地図を作る仕事は、それから73歳で没するまで続き、弟子たちには引き継がれた。石碑の地図は北海道から九州まで収めた「伊能小図」

で、現代のものほとんど違わない◆天文や測量を本格的に学び始めたのは、家督を譲って江戸に移り住んだ50歳の時からである。人生の山を一つ越えてから、もう一つの大きな山を見据えて、後世に残る仕事にとりかかった◆厚生労働省によると、55〜69歳の就業率は男性72%、女性46%。4年前の前回調査より、わずかながら上昇した。同時に、意欲があるのに仕事に就けない人もや増えていく◆何歳になっても皆が意欲を持ち続け、社会がそれを生かせるようにしたい。伊能像は力がみなぎっている。

読売新聞 17年6月11日

間宮林蔵の東蝦夷地測量

— 文政上呈図にその足跡を探す —

井口 利夫

伊能忠敬の全国測量の契機となった蝦夷地測量の主目的については、よく言われているように緯度一度を実測することにあつたとされ、後年の大きな目的となつた沿岸測量についてはそれほどの重点は置かれていなかったといわれている。その測量成果については伊能忠敬自身も十分納得していなかったようで、地図の献上にあつて自ら、天測は精密に行っているから緯度の精度は十分だが距離と角度の精度は蜜とはいひ難いと述べているし、第二次測量の幕府への申請にあたつて、「眞の地圖とは難申上」とまで述べている文面にも窺える。第二次測量の申請に際し、残る西蝦夷地の測量に合わせて東蝦夷地も再測量したかつたというのが、伊能忠敬の本心ではなかつたかと想像される。結局、周知のとおり、以後伊能忠敬が蝦夷地の測量をする機会とは与えられなかつた。従つて、伊能忠敬の北海道についての測量成果は、南東岸（東蝦夷地）の厚岸湾手前（仙鳳趾）までである。残る厚岸湾以東の東蝦夷地及び西蝦夷地の測量は、伊能忠敬から測量技術を伝授された間宮林蔵によって行われたとされている。

間宮林蔵についての保柳睦美の評価

ところが、この間宮林蔵の貢献について、保柳睦美は『伊能忠敬の科学的業績』の中でやや懐疑的な見方をしている。間宮林蔵の蝦夷地測量についての文献資料が極めて限られていて、その業績についての

評価がかなり難しいにしても、この保柳睦美の説にはいささか納得できない点がある。やや長くなるが、その当該部分（古今書院版 83 頁）を以下に掲げる。

「ついでながら、忠敬が残した蝦夷地沿岸の空白部を補つたと説明されている間宮倫宗の測量結果（大日本沿海実測全図凡例、文政四年、による）が、経度の狂いは別として、海岸線の状況は予想外に良好であることも疑問の一つである。この測量は樺太の場合のように小方位盤だけに頼つたのではなく、忠敬から天体測量法も教えられ、象限儀も持参した。しかし倫宗は探検家であつたが、測量熟達者ではなかつた。そして最も基本である道線測量をどうやつたのか、またどれだけの人数と日数で全測量を終えたのかもわからないのである。少なくとも伊能隊員のような熟練者が集められたことや、沿道の人々からの援助が得られたことは考えられない。残される道は磁針を頼りにした単身の歩測である。そうすると、こんなに長距離がかなり正しく測れたことに疑問が生まれる。だから凡例にそう書いてあつても——これは忠敬自身が書いたものではない——、他の人々の測量資料も加えての編集結果ではあるまいか。」（注 傍線井口）

以下、傍線部について、若干の私見を述べる。

①「探検家であつたが、測量熟達者ではなかつた」

探検家だつたことを強調することで、ことさらに測量熟達者であることを軽く見ようとする書き方は願けない。伊能忠敬の指導を受ける以前にも、村上島の允の弟子として測量についての訓練を十分積んでいて、実績も十分あつたと考えるべきではないだろうか。

ちなみに、大谷亮吉著『伊能忠敬』（66 頁）の「文化五年蝦夷松前奉行所在勤高橋三平重賢が忠敬に送りたる年始状」の中に間宮林蔵を

推薦する部分がある。傍証として引用しておきたい。

「扱貴君にも何卒近年之内御下り 地形御十分二御仕立 後世之鑑と仕度事ニ御座候 其節は林蔵なども貴下へ爲屬 爲被相働申度候(下略)」(注 段落スペースは井口)

②「少なくとも伊能隊員のような熟練者が集められたことや、沿道の人々からの援助が得られたことは考えられない」

初期の蝦夷地測量当時の伊能忠敬の測量体制と比較してはどうだろうか。元百姓当時浪人という身分の伊能忠敬と弟子三名(若年者も含まれる)に従者一人、それに現地の人足三人。幕府直轄後間もなく諸施設も整っていない時期。伊能忠敬の測量体制もかなり限られた内容である。一方、間宮林蔵は幕府蝦夷地奉行の幕吏で、測量時期もその10年以上後と推定されている。記録は残っていないものの、ある程度の体制は執れたものと考えるのが普通ではないだろうか。

③「忠敬自身が書いたものではない」

この保柳睦美の主張は逆のように思われる。即ち、間宮林蔵の提供した資料に対して、「辞」を贈った伊能忠敬には配慮の必要があっても、それ以外の者が冷淡であったとしてもおかしくない。むしろ忠敬以外の者が書いたということが、その貢献を無視出来なかった事を示していると考えるべきではないか。

ちなみに、「大日本沿海実測録」凡例は以下のようである。

「蝦夷地方測量未完備 故今取間宮林蔵所測 以参補之」

④「他の人々の測量資料も加えての編集結果」

これまたおかしな話で、村上島の亡亡後(文化五年八月病没)この当時の蝦夷地に、伊能忠敬の直接の指導を受けた間宮林蔵以上の測量技術をもった者が別に居たとか、各地の沿岸測量を実施していたと考える方が、無理があるのではないだろうか。

ちなみに、「伊能忠敬江戸在住日記」(伊能忠敬研究26・31号)によれば、文化14年(1817)10月11日(測量結果を持って)帰府、伊能宅訪問、その後10月15日から12月20日の間伊能宅に在泊している。この間、自らの測量結果と17年前の寛政の測量結果を照合して、蝦夷図を集成する仕事に打ち込んでいたと思われる。

但し、伊能忠敬没後、暦局と間宮の関係は断たれたようで、間宮林蔵によつてその後測量されたはずの亀田半島や知床半島の測量結果は、文政4年(1821)幕府に上呈された『大日本沿海奥地全図』(以下文政上呈図又は文政図)には採り込まれていない。

以上、文政上呈図における間宮林蔵の貢献はまず間違いないと思われる。

文政上呈図における間宮林蔵の測量部分

文政上呈図における間宮林蔵の測量部分については、大よそ冒頭に述べたように説明されてきた。しかし、もう少し細かい点にまで目を向ければ、伊能忠敬が寛政十二年(1800)上呈した東蝦夷地の絵図(以下寛政上呈図又は寛政図)内で「不測量」とし、文政上呈図で「不測量」でなくなった部分も、当然間宮林蔵の測量成果のはずである。この点について、これまで詳しく述べられたことは無いようだが、ほとんど自明と言えることだろう。

東蝦夷地の内「不測量」とされる部分は、寛政上呈図の「添書」と「凡例」に記載がある。

「寛政上呈 添書

(略)サハラよりエサン シヤクビ等は測量不仕候 ヲシヤマンベよりブンケ アプタ 又ホロイツミよりサル、ヒロウ 亦コンブムイ ゼンボウジの間 山越仕候間 右海岸測量不仕候所有

之候 乍然 圖面象形難相分候間 所々より見込候方位を以て
其海岸又は岬等圖面へ書加へ 不測の儀を相記し申候(略)「

『伊能忠敬』忠敬會(二三三) 傍線及び段落スペースは井口

同書については以下同)

「凡例

(略) 即未測ノコトラ記ス サハラ エサン シラクビ」等ノコ
トシ 「シヤマニ」ヨリ「レブンゲ アプタ モロラン ホロイ
ツミ サル、 コンブムキ ゼンボウヂ」モ亦同シ(略)「
(同上 二四〇)

以上「添書」と「凡例」

ではやや違いがあり、内容
も読み取り難いが、地図写
真などを参考にして整理す
ると、仙鳳趾までの内で海
岸部「不測量」とした箇所
は、以下の6ヶ所を言っ
ているようである。

①佐原く恵山く汐首岬
(龜田半島図中に「不
測量」と記載)

②長万部く礼文華

③虹田

④室蘭(絵納半島の太
平洋岸図中に「海岸
不測量」と記載)

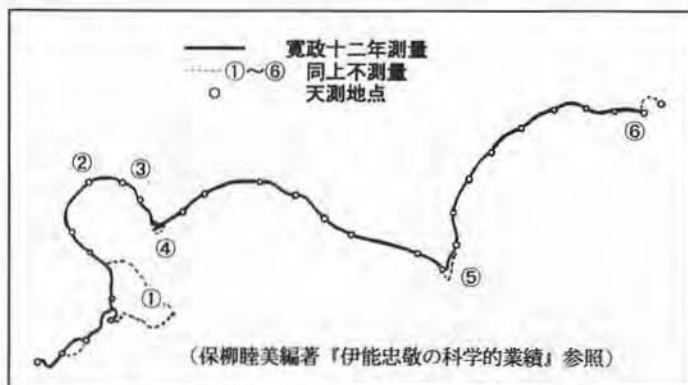


図1 寛政大図における蝦夷地「不測量」箇所

⑤幌泉く沙流留く広尾(襟裳岬及びその北東海岸一帯。エリモと
ナウセツに「不測量」「海岸不測量」と記載)

⑥昆布森く仙鳳趾(仙鳳趾の手前、尻羽岬の図中に「不測量」と
記載)

これらの内、文政図で不測量でなくなったのは⑤⑥の二箇所、龜
田半島や絵納半島の太平洋岸等は「不測量」のまま残された。

しかし、詳細に眺めると、上記以外にも幾つかの改測と思われる疑
問点が散見される。これらについては後段で再度触れることとし、先
ず、室蘭部分の測量についての大きな疑問点について述べておきたい。

室蘭測量についての疑問

(1) 測量ルートについて

室蘭地方の測量については前述のように、絵納半島の太平洋岸が寛
政図・文政図共に「不測量」とされているが、以下に述べるのはこの
点ではなく、実測されている部分の両図の測量線についてのことであ
る。

寛政12年の伊能忠敬の蝦夷地測量では、往路の測量は旧暦6月17
日(西暦8月6日)で、室蘭湾北岸を西から東へ鷺別まで横断し、復
路は旧暦9月3日(西暦10月20日)、絵納半島部の室蘭湾側を会所の
あったエトモまで測量している。従って絵納半島の太平洋岸は上記の
ように「海岸不測量」である。

この間の『測量日記』(『伊能忠敬』忠敬會)を見ると、往路は

「同十七日 朝四ツ頃迄晴天夫より曇天 朝六ツ半頃諸蘭出立
山登 海邊へ出 又山へかゝり 峠を三ツ程越 原を行 鷺

別の山中にて中食 夫より山を越 海邊へ出 五里ボロボツ
七ツ頃着 有所に止宿(略) (注 有は他書では會)
とある。当時モロラン(現在の崎守町)にはまだ会所は無かった。こ
の夜、幌別で天測を行い、幌別には二泊している。

帰路は、9月で

〔同三日前より曇天四ツ頃より小雨其後曇天 朝五ツ前母衣別
出立 驚別にて小休(エトモ迄三里十二丁半) 道法五里
八ツ過エトモへ着 會所に止宿(略)〕

絵鞆からは、船で佐原まで渡る予定だったが、順風に恵まれ
ず、二日間滞留した後、五日対岸のモロランまで船で渡り、噴火湾沿
いに陸行して佐原に向かった。絵鞆では「四日午中太陽を測る」とあ
る。

往路の測量日記については、記述の状況が海岸沿いの測量記録とし
てはやや判り難いところがあり、また既刊の文政中図では、測量線が
海岸からどのくらい離れた位置を通っているのかがはっきりしない。

当時の海岸線は崖になっている部分が多く、通行にはかなりの
支障があったようだ。寛政九年(1797)高橋壯四郎等の著した『蝦
夷巡覧筆記』に、伊能測量の直前の状況を示す記録がある。海岸線に
沿って、所々崖上にパイパスしながら湾岸沿いに絵鞆半島先端までの
行程が記載されている。室蘭湾北岸沿いの状況を抜粋すると、

「モロラン 番小屋有り」

此所山近ク木有り 當所ヨリ エトモ江舟渡シ 當処ヨリゴ
ロタ濱 少シ行キ夫ヨリ先ハ 海岸処々ワシリ有リ 浪有ル
節ハ通行ナラス ペケリウタ江山越エ道有リ 山道半里余木
立原難所行キ 小沢江下リ 夫ヨリ

ベケリウタ

(略)ゴロタ濱少シ行 夫ヨリ先大ゴロタ処々ワシリ有 浪
有ル節ハ通行ナラス ワシヘツ江ノ山道有リ

(略)此邊ヨリ内海也

是ヨリ海岸高岩ツ、キニテ汐立ノ節通行成難シ 山越道有リ

(注 崖岬を乗越す巻き道か)

ホロモエ 大ゴロタ濱 此所ヨリ又山上リ(注 ホロモイ岬
を越えホンナイ川口へ出る山越え道か) 木立原道行キ濱江
出ル

ワノシ (略)

此所濱ゴロタ 此所ヨリ山越少シノ道有(注 崖岬ワニシノ
ツを越える道か) 木立原小澤江下リ

チリヘツ (略)砂濱道行ク ヒラ切立 山近ク木有り 夫ヨ
リ

ホコイ(注 他書では「ホロイ」又は「ホロナイ」) 此所平

地ツ、キ外海見ユル 此所ヨリ外海ノ方イタンキへ出ル道規
一里余 大谷地道 此平地一里四位一鉢ノ谷地野也 富所

内海ユエ汐干潟一丁程(略) 砂濱行キ

イトケレフ

此所岩崎 海ヨリ切立通行成難シ 沖ニ岩小島有(略) 此

岩崎ノ上ヲ少シノ内越エ 夫ヨリゴロタ濱行(略)〕

以下、室蘭湾の南岸沿いにエトモまでの険しい道筋の記述が続く。
これから見るとおり、湾内沿いも何とか通行ルートは確保されていた
ことが判る。ただ、これが「測量日記」の表現するところと一致して
いるかと言えば、やや落ち着きの悪いところがあった。

2004年夏、アメリカ大図の里帰り展で大図の測量線を確認すると、中図のイメージとは違って、かなり忠実に海岸線に沿って引かれており、大きなバイパスや「峠を三つ程越え」という「測量日記」に記述のあるルートとはかなり印象が違う。改めて『伊能忠敬と日本図』（東博）で寛政大図を確かめると、どうも測線の様子が文政大図とは異なっているように見える。室蘭の測量について、伊能忠敬は上記のように往復のルートを異にしているから、この間に二種類の測量データがある筈はなく、若し両図の測線が異なっているとしたら、文政図の室蘭部分の測量結果は伊能忠敬によるものではない、つまり間宮林蔵の測量成果であるということになってしまう。



図2 寛政大図の室蘭部分

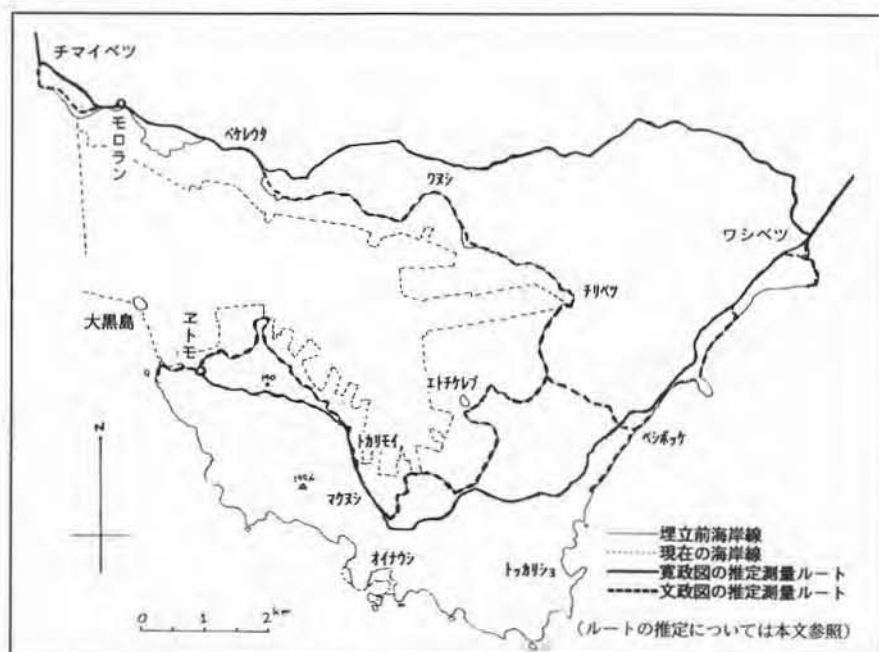


図3 寛政・文政大図の室蘭測量の推定ルート

寛政・文政両図の測量線の相違を確認するために、東博及び国立公文書館の寛政大図の実物写真（図2）を取り寄せて詳しく検討したところ、明らかに両図の測量ルートは異なっている。両図から当時の測

量時のルートを推定し、当時の海岸線の残っている明治29年陸測版製五万分図などを参考に地形図の上に落としてみたのが、図3である。絵納半島部については、両図とも測量誤差が著しいので、古地形や旧道の記録などを勘案しながら測量ルートを推定してある。

大略して言えば、寛政図は室蘭湾の北岸・南岸ともに内陸の旧道を利用してゐるらしく、一方、文政図の方は海岸線を忠実にたどるように測量ルートを選んでいるらしい。

明らかに、文政図の室蘭の測量線は伊能忠敬による寛政図のものではなく、間宮林蔵によって改測された結果に基づいていると言つてよいと思われる。

(2) 絵納半島部の測量の誤差について

「伊能間宮図」についてはその正確なことがよく言われているところだが、こゝ室蘭の絵納半島の部分に関する限り前述のように信じられない程の大きな誤差がある。図4・5にその状況を示した。現行地形図と合わせる基点として、室蘭の西境チマイベツ川口、又は東境ワシベツ川口（いずれもそれ以遠は長い海浜が続き、測量誤差が少なかつたと思われる）の2点を押さえ、それを地形図の上に落として比較してみた。寛政図では東西方向がやや短く、絵納半島先端部ではエトモまでが更に短くなっている。文政図ではこの距離の不足は無くなっているが、湾の最南端部に岬が一つ余分に描かれているのが判る。

寛政図のエトモの位置のズレは約1kmもある。図3に示したエトモ附近の測量推定ルートは、エトモの位置から逆にたどって推定してあるが、図4の点線部分がエトモの位置を基点として落とした場合を示している。エトモの位置が大きく外れていることは、エトモから目と鼻の先にある大黒島との位置関係で直ぐに気付くはずである（対岸の

モロランと大黒島の関係はほぼ正しい）。厚岸以東の測量できなかった地形については、交会法等により大略遜色のない絵図を描き残している。それと比べて何故こんな誤りが残ったのかは不思議である。

文政図では、モロランとの関係からはエトモの位置は合っているのだが、湾の南の最奥部に岬が一つ余分に描かれている。この岬の附近に書かれた4つの地名の位置や描き込まれた沼や分岐測線の位置が、

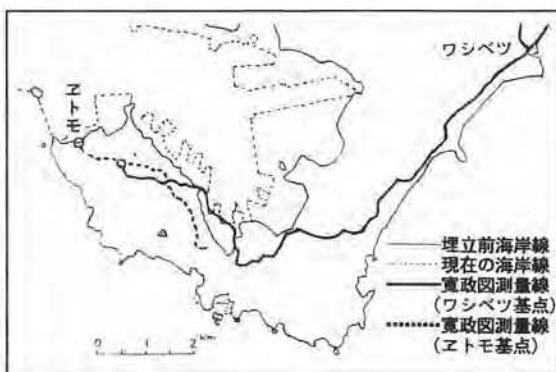


図4 寛政大図の室蘭絵納半島部

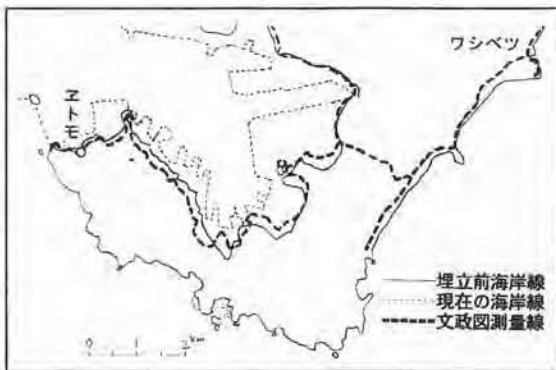


図5 文政大図の室蘭絵納半島部

他の史料と比較すると混乱していることが判る。この誤りについて、大胆な想像をすれば次のようなことも考えられる。例えば、この部分の測量データに不整合でもあって、その処理方法として、ワシベツの

方から途中まで図化する一方、エトモの位置を交会法などで確定してこちらの方からも図化をすすめ、中間の測量データの混乱した部分を峠一つ分に整理したのではないか、という想像である。この部分の地名・描写の位置関係を解きほぐすことで、この過誤を起こした原因を更に尤もらしく推定できるかもしれない。

(3) 地名記載数についての疑問

また地名について言えば、他の地方も含めて寛政大図と文政大図とは地名の記載数に著しい違いがある（本稿では省略するが、小地形の描写や川口の位置についても同じことが言える）。室蘭地方では、寛政大図の地名はわずか5つだが、文政大図では24に増えている（伊能忠敬研究40号の拙文参照）。寛政大図の「自クスリ至アツケシ」では、仙鳳趾までの測量範囲に5つ、未測量範囲に9つあるが、文政大図の仙鳳趾までの間には16の地名がある。噴火湾沿いの寛政大図「自ヤマコシナイ至アブタ」の11に対し、文政大図の同じ範囲の地名は50もある。いずれも大幅に増えている。

小図の地名位置は若干アバウトでも記載可能だが、大図の場合は地名に測量データが伴っていないと、正確な位置への地名の書き込みは難しいはずである。

この地名数の差について考えられることは、(a)寛政図の段階で採録した地名を記載しなかっただけなのか、あるいは(b)文政図の地名が間宮林蔵によってもたらされた情報によるものなのか、である。若し後者(b)であったりすると、文政図は東蝦夷地もほとんど総て間宮林蔵の測量成果によって改められている可能性が出てくる。従来の定説をゆがせることになりかねない。

ただ、前者(a)の可能性を示す一つの手掛かりも寛政図の室蘭の地名に残されている。『伊能忠敬の科学的業績』（51頁）に掲載された、寛政小図（伊能忠敬記念館蔵。図省略）の室蘭部分に「トカラシヨ」という地名が見えることである。これは太平洋岸の海蝕崖の中の小浜で、奇岩の目立つ地帯のアイヌ語地名「トツカリシヨ」に違いなく、寛政・文政大図のいずれの測量線も達していない地点である。伊能忠敬は山道にかかる前に遠望したのか、山中で分かれ道の行く先として記録したのか、であろう。この地名は、文政大図を含めて他の伊能間宮図には無い。

その他の地方の両図の比較

寛政図の中で海岸線を大きくバイパス測量している箇所は、先に述べた寛政図の添書・凡例で「不測量」とされた箇所以外にも散見される。これらの箇所を加えて先のリストを補完すると、次のようになる。

① 佐原く恵山く汐首岬（亀田半島全体）

② 長万部く礼文華（シツカリくレブンゲの間「海岸不測量」と記載）

③ 虹田

（礼文華く虹田の間で、レブンゲくオブケシ、ベンベツ（文政図はベ、ツ）くフレナイ、アブタくウスの3ヶ所の山越えがあるが、いずれも「不測量」の記載なし）

④ 室蘭

（図中太平洋岸に「海岸不測量」と記載。他に既述のように、モロランくワシベツの間の山越えは「不測量」の記載なし）

⑤ 幌泉く沙流留く広尾（襟裳岬及びその北東海岸一帯。図中エリモとナウセツに「不測量」「海岸不測量」と

記載。広尾までの東側海岸部までの山越は「不測量」の記載なし)

⑥ 昆布森く仙鳳趾 (コンフモイートマチヒ子ツフの間の山越えは「不測量」の記載なし。図中シヨンテキく仙鳳趾間の尻羽岬に「不測量」と記載)

これらの個所の内、不測量のまま残された個所についても、ほとんどすべての個所で海岸線の測線が先へ延ばされており、間宮林蔵の改測の成果が織り込まれているように思われる。

寛政大図と文政大図を細かく見比べてゆくと、これ以外の部分にも両図の測線にはかなりの違いが認められるが、各地域の詳細については、紙面が限られているため機会を改めて述べることにしたい。ただ、若し両図の測線に相違があったとしても、それだけでは文政図Ⅱ間宮林蔵ということはできない。室蘭を除いて、寛政測量には往復路それぞれ別の測量データがあった可能性を否定しきれないからである。

両者の野帳が失われた今となつては、この疑問を解くことは難しそうだ。ただ、両図を比較しての心証としては、前述の地名や細部の描写についての疑問もあり、文政上呈図の東蝦夷地のかかなりの部分が間宮林蔵の改測による結果であるように思われてならない。

あとがき

伊能間宮図に興味をもちはじめから未だ日の浅い者が、このようなことを書いても良いのかという迷いはあった。しかし、北方図研究に造詣の深い当会員でアイヌ語地名研究会会員でもある高木崇世氏から励まされて、諸賢の御批判を覚悟の上で文をまとめてみることにした。先輩諸賢の忌憚らない御批判、御教示をお願い致したい。

またこの調査に当たつて、高木崇世氏より伊能間宮図のアイヌ語地名について数々の御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

(スペースの都合で省略したが、文政大図の室蘭地方の図については『伊能忠敬研究40号』の筆者拙文を参照されたい)

(いぐち としお・室蘭地方史、アイヌ語地名、松浦武二郎研究家)

【参考文献等】

- 『蝦夷地図(大図)』 七鋪 東京国立博物館蔵
- 『松前距蝦夷行程測量分図』十軸 国立公文書館
- 『文政上呈伊能間宮大図模写図(仮)』 米国議会図書館蔵
- 『伊能図里帰り展I』2001 伊能忠敬記念館
- 『伊能図』 2002 武揚堂
- 『伊能忠敬と日本図』2003 東京国立博物館
- 『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』2004
- 『伊能忠敬 附遺著測量日誌』明治44年 忠敬會
- 『伊能忠敬』大谷亮吉 大正6(1917)初 1979名著刊行会
- 『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美編著1974初1997古今書院
- 『日本北辺の探検と地図の歴史』秋月俊幸1999 北大図書出版会
- 『伊能忠敬研究』第26・31号 伊能忠敬研究会
- 『伊能忠敬の江戸在住日記』(六・一〇) 佐久間達夫
- 『間宮林蔵』洞富雄 平成8(1996) 新装版第三刷 吉川弘文館
- 『北海道の文化67』1995 北海道文化財保護協会
- 『秦檜丸作製の蝦夷地図』高木崇世氏
- 『蝦夷巡覽筆記』高橋壯四郎等著 寛政9(1797) 内閣文庫蔵
- 『五万分一その他旧版地形図』 参謀本部陸地測量部・国土地理院

続・伊能忠敬未公開書簡より その三

伊能妙薫宛 箱田園右衛門からの依頼状 B159

伊藤 栄子

〔解説文〕

一筆啓上仕候 先以、追日
暖氣二押移り候処、益、御婚（機）嫌克
可被遊御座と奉恐賀候 次二当方
無異二罷在候間、乍恐御休意可被下候 且、
左太夫儀、長々御世話二被成下、難有
仕合奉存候 此上万事宜敷奉願上候
猶又、養子先へ罷越候節、持参金
等不足二て、指支申候様之儀も御坐候
節は、何卒御立替被下候様奉頼上候
早速此方より御返済可申候 此段一偏二
御頼奉申上候 誠に是迄逆も
御厚恩之程、此元二て一統難有
奉存上候 乍此上、万端宜敷様
奉頼上候 先は、以愚札申上度、
如斯二御座候 恐惶謹言

一筆啓上仕候 先以、追日
暖氣二押移り候処、益、御婚（機）嫌克
可被遊御座と奉恐賀候 次二当方
無異二罷在候間、乍恐御休意可被下候 且、
左太夫儀、長々御世話二被成下、難有
仕合奉存候 此上万事宜敷奉願上候
猶又、養子先へ罷越候節、持参金
等不足二て、指支申候様之儀も御坐候
節は、何卒御立替被下候様奉頼上候
早速此方より御返済可申候 此段一偏二
御頼奉申上候 誠に是迄逆も
御厚恩之程、此元二て一統難有
奉存上候 乍此上、万端宜敷様
奉頼上候 先は、以愚札申上度、
如斯二御座候 恐惶謹言

二月十日

箱田園右衛門

伊能妙薫様

追て三郎右衛門様ニも御上様より結構
被蒙仰候由、此元ニても奉恐悦候
御序刻、乍憚、宜敷御祝詞被仰上
可被下候 早速、愚書可差上申処ニ、
左太夫方より之、去二日出之書状、何れニて
滞候哉、当二月八日到着仕、右ニ付、
延引之段、御用捨可被下候 以上

二月十日

箱田園右衛門

伊能妙薫様

此書状より御上様より結構
被蒙仰候由、此元ニても奉恐悦候
御序刻、乍憚、宜敷御祝詞被仰上
可被下候 早速、愚書可差上申処ニ、
左太夫方より之、去二日出之書状、何れニて
滞候哉、当二月八日到着仕、右ニ付、
延引之段、御用捨可被下候 以上

口語文

一筆御便り申し上げます。まず以つて日毎に暖氣に移り、ますます御機嫌よく

御過ごしとの事、御祝い申し上げます。さて、私共も無事に生活しておりますから、御安心ください。また、左太夫も、長々御世話様になり、有難うございます。此上とも万事宜しく御願ひ申し上げます。

尚また、養子先へ行く様になつた時、持参金など不足になつて、困る様なことがありましたら、何卒、御立替を頂きたく、御願ひ申し上げます。その時は、早速私方で返済を致します。この事のみひとえに御頼み申し上げます。誠に是迄についても、御厚恩の程、私共一同感謝致しておりますが、この上ながら、万事宜しく御頼み申し上げます。とりあえず、手紙にて御願ひ申し上げました。

恐惶謹言

二月十日

箱田園右衛門

伊能妙薫様

追つて、三郎右衛門様にも、公方様より御誉めに与つたとのこと、私共も御悦び申し上げます。

お序での時に、御祝い申し上げた事を御伝えください。早速に御手紙を差し上げようと思ひました処に、左太夫からの去る二日*出の書状、何処で滞つて

おりましたのか、当二月八日に到着いたしました。遅れたことを御許しください。以上

*去る二日は一月二日のこと。

箱田家と良助の生い立ち

箱田園右衛門は、備後国安那郡箱田村（今の広島県深安郡神辺町）の庄屋（近畿より西国では名主のことを庄屋という）であつた。箱田村は福山藩に属してゐた。箱田家の本姓は細川というが、この時代、村名や地名を姓のように使うことは珍しくはない。飛脚便などには、分りやすいらしい。園右衛門の妻は元阿部伊勢守の家来、浦部兵十郎の娘というから、武家育ちとみえる。この父母の次男として良助は、寛政二年（一七九〇）に生まれた。若年は真与（しんよ）といつた。後年、左太夫、園兵衛武規と名乗り榎本家を継ぐ。幼い頃より秀才の聞こえがあつて、勉学を好み、江戸に出て学ぶことを熱望してゐた。たまたま、それを聞いていた土地の奉行が、参勤交替の出府に当たり、両親の許しを得て良助をつれ江戸に登つた。ここまでは、ほぼ通説である。しかし地元の家によつて、実は兄の忠太と良助の二名が江戸へ向つたといわれる。箱田家には男子二人の子供しかいなかった。二人とも向学心に燃えていたようである。ところが、ある時から兄の消息が途絶えてしまひ、兄の手紙も殆ど残つていないので、土地の人は病死したらしいといふ。これにより箱田家は、良助の従兄弟（いとこ）すじの人を跡取りにして、名主役を継がせた。それにしても二人の男子を、わが子を信じて同時に旅立たせた園右衛門の決断は、並の人にはできない。文化の初年、江戸に出た良助が十七才の時であつた。

良助の育った土地の近くには、菅茶山かんざん（一七四八～一八二七）という儒学者の出身地があった。神辺というから、箱田村の今の地名と重なる。茶山は通称太仲、若くして京都に遊学し、帰郷後、自家の近くに塾を建て、近隣の子弟に漢学を教えた。茶山はもとより詩をたしなみ、詩名はよく知られていた。しかし、福山侯は初めその名を知らず、後で聞いて大いに驚き、召して俸禄を与えて藩の儒員とした。

良助の住居の近くからは、この茶山の教えを受けた者も多く、近辺の名主家の子弟は、皆、茶山の塾に通ったという。良助はすでに江戸へ出るまでに、漢学をたしなんでいた。

文化の年号が変わる前後より、日本を開く情勢は変わりつつあった。すでに北方からはロシアの脅威が迫っており、北辺警備の問題が急務となっていた。そのためには北方の地の探検や測量は不可欠であった。伊能忠敬は、寛政十二年（一八〇〇）奥州街道を北に進み、箱館から釧路、更に根室の先の西別まで測量している。その前にも、最上徳内、林子平、近藤重蔵、間宮林蔵らによって、北辺の事情は少しずつ明らかになっていったが、間もなく間宮林蔵は、測量術を学ぶために忠敬の弟子となる。こうした時流を若い良助が察知しないわけはなく、彼も伊能忠敬の内弟子となって、数学や天文暦法を学ぶことになる。

文化六年第七次の九州測量に、良助は内弟子として初めて加わった。これ以後、第八次、第九次、第十次の御府内測量の第一回まで測量に従い、忠敬の死後も、文政四年の奥地全図の完成まで尽力している。

大体、内弟子という者は、四六時中、師と向き合っているようなもので、まして気むずかしい忠敬は、実子や弟子にも中々及第点をつけなかった。しかし、良助の評価は高く、信頼は厚かったという。

旗本の株を買う

この書状の追書きを見ると、將軍より御誉めに与ったという一行がある。忠敬は文政元年に他界したが、事情があつて死は伏せられていた。その後、死が公表された時、幕府は忠敬の功を称え、孫の忠晦に五人扶持と江戸に屋敷が与えられ、永代帯刀を許した。この事が追書きの一文に当たる。これが文政四年であつた。良助が何時ごろ榎本家に入ったかについては、二説ある。榎本家の家系図には、文政元年となつていてという。一般には、文政五ごろとされる。文政元年というのは、榎本家の当主が亡くなった年で、旗本の家として相続人が無ければ、御役は取り上げられてしまう。そこで上記の元年としたのであろう。当時の武家の風潮は、自家の株を売ってでも、庶民から有能な人物を養子にし、財政的にも困難を切りぬけて、家運の挽回をはかる家が多かった。一方、武士の株を買うには、まとまった金がかかる。今回の良助の場合、これにも諸説あつて、ある本では千両、また五百両などといわれている。箱田家は商人でもなく、事業家でもない。箱田村は、元禄十三年（一七〇〇）の御検地水帳（広島大学蔵）によれば二七六石余で、石高としては小村である。

又、備後といえど、豊表の生産で名高いが、これは幕府の方針により、この近くでは指定された村だけが、江戸城御用達として、生産を許されていた。従つてこうした生産に携わることもなかった。しかし、良助の手紙の中に、忠敬の意志で、備後表を注文した内容の一紙がある。生産者への仲介を依頼したのであろうか。ともかく、小村の庄屋では数百両は無理であろうと、地元の史家はいう。

当時、幕府の役職は時に売買されていて、例えば高瀬位として、検校（けんぎょう）の株は千両といわれた。勝海舟の祖父は盲人であ

ったが、越後から江戸へ出てきて小金を蓄え、それを元手に金融業をはじめて財を成した。それを一般に座頭金と呼んでいるが、彼はこれで検校の位を手に入れた。別に学問に優れ、また楽器の名手であったわけでもない。しかし、財政的手腕は優れていて、子孫には皆夫々士分を買ひ与えたという。検校の株千両は高額な方であって、旗本の場合には人員も多く、石高や立場により金額は千差万別であろう。

今回の書状は、その時のことを心配して、養子先への持参金等の不足の場合は、是非とも立替えを御願いしますと依頼をしている。園右衛門の親心が伝わってくる。箱田家から、榎本家に支払った額は具体的に記されていないが、幕末になって、こうした例は次第に多くなっていた。

以下次号

(いとう えいこ・古文書研究家)

「武揚堂」社名、社印の由来

小島 久武

当社名の由来は、創業者小島棟吉が明治三十年に軍用図書(兵隊が使用する教科書)の出版を起業したことから、武を揚げるとの意図がありました。榎本武揚存命の事から、名前を使用するのにあいさつをして、心良く了承されたそうです。本来「武」の字は戈を止とどめるので平和の意味があつて、平和を揚げるものと聞かされました。

第二次大戦後GHQに指示され「ぶよお堂」に改名された後、昭和



1897

創業百周年を経た日本一の
地図老舗。明日に向って新し
さへ絶えず挑戦している。

三十年を過ぎて「武揚堂」を復活致しました。現代かな遣いでは「ぶよう堂」になるのですが戦後まもなくは、「お」でも「う」でも許されたので字形の良い「お」にしたそうです。

社章は、当初が○に武で、戦前は陸軍の山形に類似して○に山の

橋を合せて今のマークとしました。○は愛、・は智、△は力を表わし、

円満だけでなく打破する求心力も示しています。

伊能図は国際地図学会の三十周年、四十周年の節目に近代地図のルーツとして、大先輩の偉業を残したいと取り組みました。中図一枚の時は文字が読めずに燃焼できませんでしたので、伊能図では原寸復刻を達成できました。

しかし、英国中図や新たな発見が相次ぎ、次の発行意欲が始めています。伊能中図は原寸、全編が一冊になっている貴重な資料ですが、まだ普及が不十分で残念です。もっと多くの人に伊能図を見てもらい、研究成果や地図愛好家が出現するのが楽しみです。

(こじま ひさたけ・武揚堂社長)

伊能忠敬と間宮林蔵

師弟の絆が蝦夷地の地図完成（二）

佐久間 達夫

七、間宮林蔵の蝦夷地測量図

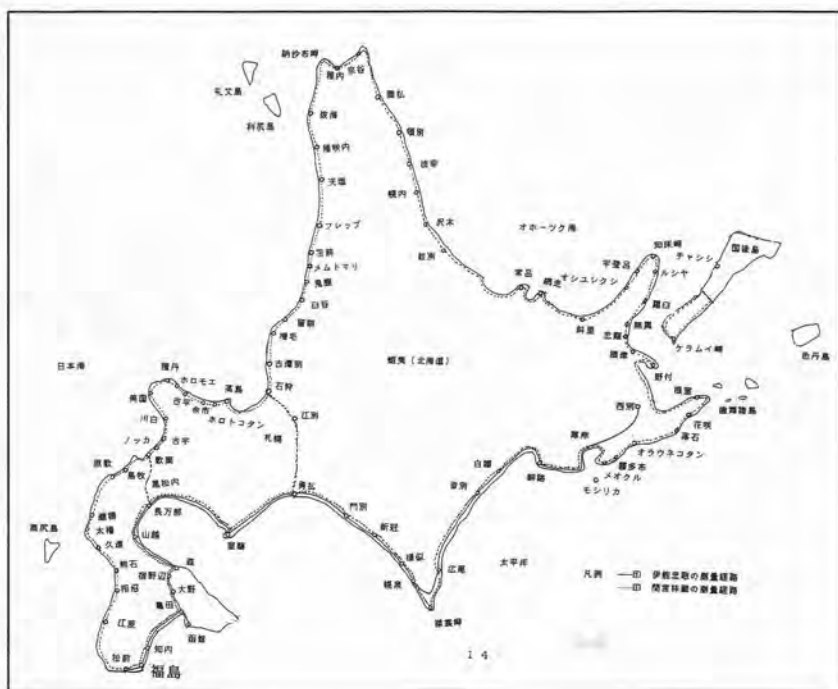
間宮林蔵の蝦夷地測量の内容を、伊能忠敬記念館で所蔵している蝦夷沿海地図の下絵図と伊能忠敬や間宮林蔵の書簡等から推察してみると、林蔵は、文化十年から三年程の年月をかけて蝦夷地の沿岸全部と、内陸部の長万部から歌棄迄と勇払から石狩迄とを測量したようである。

伊能忠敬記念館には、第七次測量から第十次測量迄に実測した箇所の下絵図は全部といつていい程保管されているが、第一次測量から第六次測量迄のものは数える程しかない。これは文化十年二月二三日に浅草にあつた暦局が火災にあい、その時、下絵図も焼けてしまつたことが考えられる。

従つて記念館で保管している「蝦夷の下絵図」は、林蔵が実測した資料をもとにして作製したものといえる。そのことを裏づけるものとして、蝦夷南海岸は、忠敬と林蔵の両隊が測量したのであるが、伊能図に記されていない地名や川の名等が間宮図には記入されている。

間宮図には三種類の下絵図がある。一つは、測量の野帳を基にして小区域の測量地を地図にしたものである。二つ目は、前記の地図を寄せ合せて幅三尺（九〇cm）長さ六尺（二八〇cm）程の大きさ

蝦夷地全圖



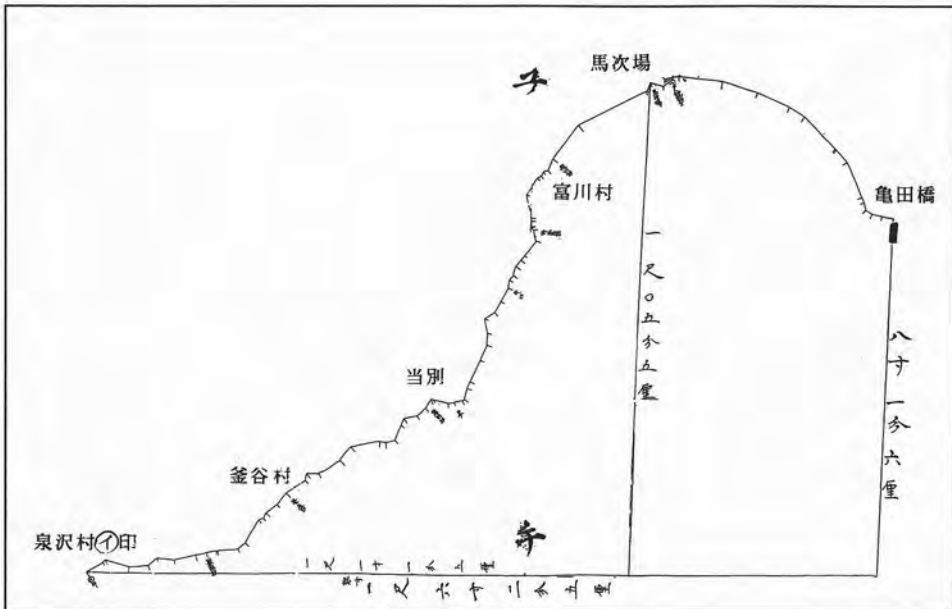
筆者作成

にしたものである。これが大図の原本で「寄せ絵図」あるいは、「突

手本」ともいつている。縮尺は三万六千分の一である。三つ目は、寄せ絵図を何枚か集めて一定の大きさに縮小して作成した地図で、これが縮尺二十一万六千分の一の中図である。この中図の測線は、朱色で書かれていて、五葉で蝦夷沿岸と国後島があらわされている。また、この中図の裏には「一里六分六厘」と記されている。次にこれらの地図を詳しく記してみよう。

資料一 間宮林蔵測量小区域図(大図)

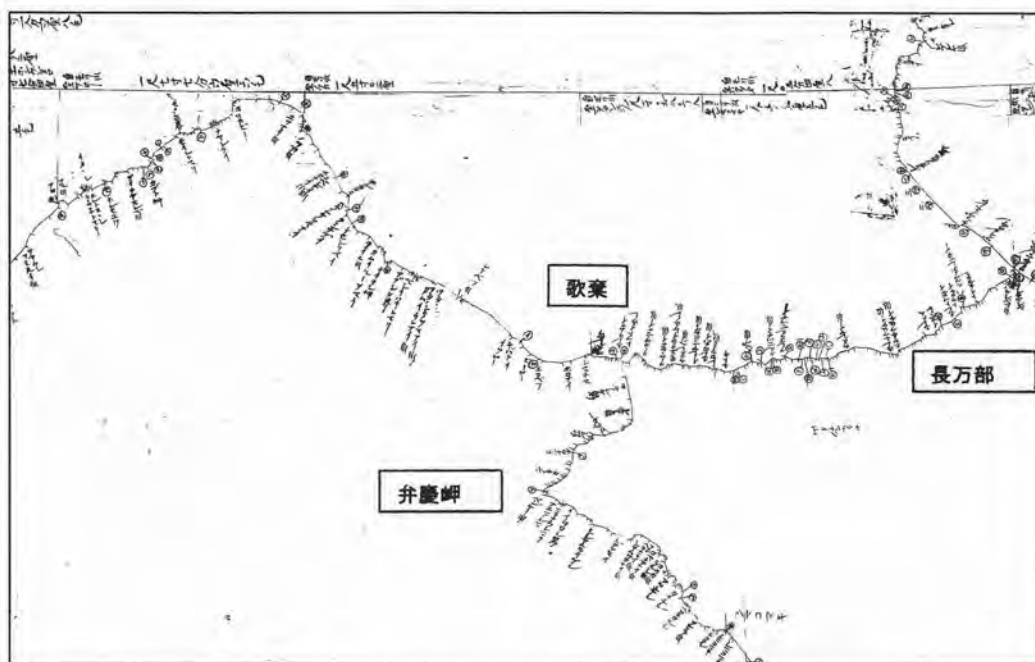
- 1 箱館亀田橋より茂辺地村、泉沢村⑦印迄
 - 2 泉沢村⑦印より木古内、知内迄
 - 3 松前より赤神、オコナイ⑧印迄
 - 4 オコナイ⑧印よりアイトマリ、石崎、木野子村、ヨシカサワ四印迄
 - 5 ヨシカサワ四印より江差、トノマ迄
 - 6 トノマより厚沢部、乙部村、小茂内、カキカケ迄
 - 7 鶴川より沙流川迄
 - 8 沙流川より門別、幌内、ウタシヤブ迄
 - 9 ウタシヤブより無谷辺、新冠、静内迄
 - 10 静内より門別、ホロフ、モッペ、ケレマブ川迄
 - 11 ケレマブ川よりイカンライ、浦河⑨印迄
 - 12 国後島
- ・クナシリよりトー沼迄
 - ・シレムイよりフーニ崎迄
 - ・フーニ崎よりチャシシ迄
 - ・シレムイよりノテト迄
 - ・ノテトよりケラムイ迄



蝦夷地小区域図 自箱館亀田橋 至泉沢村⑦印 (伊能忠敬記念館蔵)

資料二 間宮林蔵測量寄せ絵図（大図）

- 1 弁天（現松前町）より松前、荒谷、白神岬、吉岡、福島、岩部岬、重内、木古内迄
- 2 木古内より泉沢、当別、富川、亀田、箱館、尻沢部迄
- 3 箱館より千代田、大野村、市ノ渡、峠下、茅部峠、追分、鷲木、落部迄
- 4 ノマジリ川より遊楽部川、国縫、長万部、歌棄迄
- 5 ヌフキベツ川より虻田、長流エントモ、室蘭、鷲別迄
- 6 鷲川より沙流川、新冠、静内、鳧舞迄
- 7 様似より幌泉、襟裳岬、庶野、猿留迄
- 8 ホントモチクシより音調津川、広尾、音別、モコトウチカボヤニ迄
- 9 オビネツプ川より落合、花咲、イヌヌウシ川、内陸部を経て根室迄
- 10 ハタラより温根沼、風蓮湖、西別、タムカ、春別川、トボロ川、セツノシタ迄
- 11 小向より紋別、沙留、沢木、雄武川、幌内川、音標、乙忠部、枝幸、神威岬、斜内、頓別川、猿払川、本枝幸部、鬼志別川迄
- 12 鬼志別川よりトマリオロ川、シルシュツ岬、宗谷、クチャブツ川迄
- 13 クチャブツ川よりウエンノツ岬、野寒布岬、カムイトウ、抜海、稚咲内、サルル、天塩、モウツ川、ウエベツ川、シュサンベツ川、シエルソマナイ、苫前、メムトマリ、オニシカ、ウーシヤ、ルルモツベ川、オピラ、アフニ、本増毛迄
- 14 ハシベツ川よりブエマシリ、増毛、グリーン、別茹迄



間宮林蔵測量・長万部、歌棄付近下絵図（伊能忠敬記念館蔵） 方角は左が北

15 ペシイワキより古潭別川、石狩川、小樽迄

16 小樽より高島、ノテト、塩谷、フンコンベ岬、下余市、古平

川、美国、ラオツベ迄

17 国後島

・ノテト崎よりモシリノシケ、ケムライ崎、トーフツ迄

・イソヤマベツよりフーニ、チャシシ、トカルンワタラ迄。

・ノテト崎よりシレムイ、トーパロ、ケラムイ崎迄。

資料一三 間宮林蔵測量一里六分之二図（中図）

括弧内は、間宮林蔵測量下絵図の地名

1 松前（マツマエ）より白神岬（シラカミ）、吉岡（ヨシオカ）、

福島（フクシマ）、知内（シリウチ）、泉沢（イズミサワ）、箱館

（ハコダテ）、大野（オオノ）、市渡（イチノワタリ）、茅部峠（カ

ヤベ）、宿野辺（シユクノツペ）、追分（オイワケ）迄

2 森（モリ）より落部（オトシベ）、野田追川（ノタオイ）、山越

（ヤマクシナイ）、遊楽部川（ユウラツフ）、国縫（クンヌイ）、

長万部（オシヤマンベ）、静狩川（シツカリ）、札文華川（レブ

ンケ）、蛇田（アブタ）、有珠（ウス）、長流別川（オサルベツ）、

室蘭（モロラン）、ホロベケレオタ川迄

・長万部よりオハルシベツ川、トイタコタン、ホントツタナイ、

イヌヌシ、ウタシャイ川、チトキ、歌棄（オタシュツ）迄

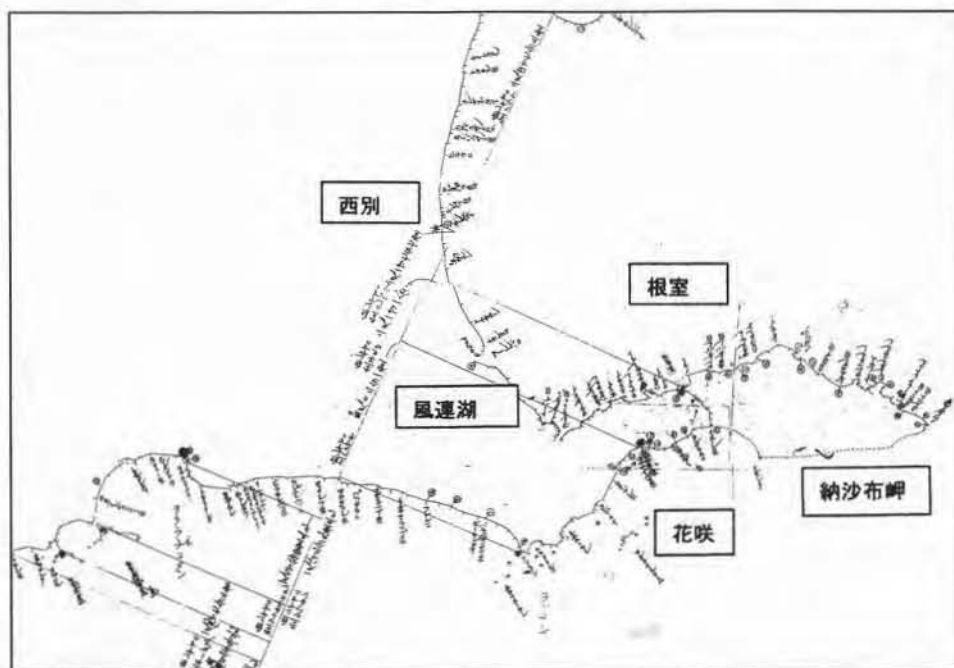
・相沼内（アイオマナイ）より熊石（クマウシ）、久遠（クドオ）、

太櫓（フトロ）、瀬棚（セタナイ）、島歌（シモオタ）、弁慶岬

（ベンケイ）、寿都（シツツ）、尻別川（シリベツ）、雷電岬（ラ

イテン）、野狐（ノッカ）、古宇（フロウ）、川白（カワシラ）、

神威岬（カムイ）、積丹（シヤコタン）、美国（ビクニ）、余市



間宮林蔵測量 根室、花咲付近下絵図（伊能忠敬記念館蔵）

(ヨイチ)、忍路(ウシヨロ)、高島(タカシマ)、古澤別川(コタンベツ)、ベシイワキ迄

3

様似(シヤマニ)より幌泉(ホロイズミ)、襟裳岬(エリモ)、庶野(シヨウヤ)、広尾(ヒロウ)、白糠(シラヌカ)、庶路川(シヨロ)、大楽毛川(オタノシケ)、釧路(クスリ)、昆布森(コンブムイ)、尻羽岬(シリハ)、厚岸(アツケシ)、霧多布(キイタツプ)、落合(オツチシ)、花咲川(ハナサキ)、納沙布岬(ノッサム)、根室(ネモロ)、温根沼川(オンネトウ)、風蓮湖(フウレンバロ)、西別(ニシベツ)、春別川(シュンベツ)、野付(ノツケ)、忠類川(チュウルイ)、蕨別川(ケンシベツ)、羅臼川(ラウシ)、ルシヤ川、オシヨロコツ迄

4

幌別川よりウカオブ、斜里川(シヤリ)、溝渚(トウブツ)、藻琴川(モコト)、網走川(アバシリ)、能取岬(ノトロ)、常呂川(トコロ)、湧別川(ユウベツ)、小向川(コムケ)、紋別(モンベツ)、沙留(サルル)、沢木(サワキ)、枝幸(エサシ)、斜内(シヨナイ)、頓別(トンベツ)、シルシュツ岬、宗谷(ソウヤ)、野寒布岬(ノッサム)、稚咲内(ワツカシヤクナイ)、天塩(テセウ)、苫前(トママエ)、留萌(ルルモツペ)、セモシュツ、別荘(ベシトカリ)迄

5 国後島

ノテト崎よりブーニ、トウフツ、トー沼、ケラムイ崎、ノテト崎迄

なお林蔵の蝦夷地の内陸部の測量は、太平洋側の長万部より黒松内を経て日本海側の歌棄迄と、太平洋側の勇払より美々川、千歳川、トム川、シコツ、オサツ、カリンハ川、夕張川、島松川、石狩川を経

て、日本海側の石狩川の河口迄(横切測量)とである。林蔵は、これらの測量資料を江戸の伊能忠敬宅へ持参した。

文化十二年十月、江戸府内の測量の終った忠敬は、文化十一年六月に移転した亀島の地図御用所で、天文方の下役や内弟子たちと一緒に、十七年間にわたって行った測量資料と間宮林蔵から提供を受けた蝦夷地の資料とを基にして「大日本沿海輿地全図」の作製に励んだ。

しかし、実測全図の完成を見ずに文政元年(一八一八)五月一七日七十四歳の生涯を閉じた。

忠敬の死によって地図作製の指揮は、高橋景保に引き継がれ、文政四年七月に、縮尺三万六千分の一の大図二四葉、縮尺二万六千分の一の中図八葉、縮尺四万三千二分の一の小図三葉の三種類の地図がやっと完成した。

八、師弟の絆で結ばれていた忠敬と林蔵

蝦夷地測量の往路と復路の二回の面識が縁で忠敬と林蔵とが、固い絆で結ばれた要因は何であったのか。それは、忠敬の全国測量と林蔵の北方の地の探検が、共に未知のものへの探求であったことと、自分の仕事に対しての誇りを共に持っていたことが二人の結びつきを強固にしたのではないか。

林蔵は、忠敬宅で扶持米や鶏卵を持参し、天体観測や沿岸測量の術を学んだ。又、測量に必要な羅針や象限儀等の機器を忠敬を通して購入している。

一方忠敬は、自分が一番将来を期待していた孫の将来のことや、江戸深川の隠居宅の売却のことなどを林蔵に相談し、助言を受けている。なお、忠敬の唯一の論文である「仏国曆象編斥妄」の中には、林蔵

のことを次のように記している。

資料一四 「仏国曆象編斥妄」 伊能忠敬記念館所蔵

○「仏国曆象編斥妄」 卷之五 曆法第四之三 凡二十七条

・西法の地度、その実に合わずことを論ず。

(略)

○忠敬見解

この初めの論、卷二の西洋の定む所、経緯甚だ非の篇で弁ず。

又、近者、吾邦の里法を以て地度を測る者有る。曰く、北極出地を驗し、二十八里四百二十歩にして、一度差う。故に地球周一万百五十二里とは、即ち吾に測驗する所也。

余、命を蒙り測量をなす也。十余年、昼里程、方位を量り、夜は北極高度を測る。隅州屋久島より蝦夷に距る南北十五度、奥州より肥前の五島に距る東西も、また十五六度也。測量終りて沿海地図を製す。経緯度悉く符合す。

又、吾門生、間宮林蔵、北蝦夷を測り満州を距る。北極出地五十度余也。即ち支那乾隆の十六省国図と合す。

測驗に拠らず、何ぞ万邦広狹の論なすか。

・金辺山、及び閭浮樹を得て、窺うべきことを論ず。

(略)

○忠敬見解

今世、幸いに望遠鏡有り、斉持して蝦夷の北に至り、高山よりその北を窺えば、必ずまさに金辺の光明、及び閭浮樹の相を觀得るべし。蝦夷の極北は宋也。北極高四十五度也。北蝦夷(方言唐人)は四十六七度也。

余門生、間宮氏、北蝦夷を歴て満州に至る。北極高五十度余也。

然れどもその説なし。紅毛、魯西垂五十五度より六十度に距る。金辺の光明、閭浮樹の説有るになびく也。杜撰孟浪論に足らず矣。

ここに記述してあるように忠敬は、林蔵のことを「わが門生」といい、「林蔵の測定した北蝦夷(樺太)と満州の北極出地度が五十度余という数値は、支那乾隆の十六省国図と一致している。実測もしていないで地度の広狹を論ずるは如何」と、間宮林蔵の北方の地での実測値を高く評価している。

又、仏家の天文宇宙説である「宇宙の中心は須弥山(妙高山)で、宇宙は、九山、八海、四大州からなっている」という説に対して、忠敬は、林蔵の北方の地での実測値を基にして、これらの説は「杜撰孟浪論である」と述べている。

林蔵は、晩年、隠密御用を命じられ海防等に尽力したが、天保十五年(一八四四)二月二六日、江戸本所外手町で六十五歳の生涯を閉じた。

資料一五 「忠敬先生日記」五〇

・文化十一年九月二五日 晴。蝦夷会所間宮林蔵へ書状を出す。

・文化十二年三月一七日 曇。間宮林蔵方へ申越の薬種書状添、田中金六方へ尾形手紙にて蝦夷会所へ頼遣す。代金三步と錢六十八文同人より差越候旨申遣す。

資料一六 「伊能忠敬書状」一一四

文化九年一月二日

・三治郎、鉄之助壯健と大慶致し候。三治郎銀仕立の大小刀を被悦候哉、帯解迄は損し不申候様に御申付可被成候。我等国々を年来

帶し候ゆへ、大に吉左右に御座候。扱、三治郎芸事仕立の儀、御心配可給候。第一手習、第二読みものを為致申度候。間宮林蔵も我等と同意の所に候。兎角そもしの保養を專一に被成候様、春色には二、三日間にも、十町、十五町宛は出歩行申候様に可被成候。猶、追々可申入候。目出度かしこ。

正月二日 摂津国武庫郡郡山より。明石城下より正月五日出
妙薫御房

おりてどの まいる

東河父

資料一七 高橋景保より伊能忠敬宛の書状 伊能忠敬記念館蔵

文化八年十二月二日付

嚴寒に候得共、其後愈御安全御精勤候哉承度候。当地拙家何も別異無之候間、乍憚御休意可被下候。

然者、深川御留守宅之儀、御壳弘之儀、秀蔵子、並に間宮林蔵江御託し候由にて先日より某江掛合有之候に付、三郎右衛門殿茂承知に候はば、如何様とも取計可然旨、答候処、未だ御同人江は御相談茂無之由……(以下略す)

伊能忠敬と間宮林蔵との絆について、「伊能忠敬書状」「伊能忠敬測量日記」「蝦夷地下絵図」「仏国曆象編斥妄」などを依拠史料として記してみた。

身分制度の厳しい封建社会で、商家の主として、或いは、農民の子として生きた忠敬と林蔵。二人には共通の人生観があったように思われる。人生の前半生で商才をはたらかせて財産を蓄積し、その金を使って後半(天文曆学の履修・全国測量と日本地図の作製)の人生を意義あるものにした忠敬。一方、蝦夷地勤務の手当を日本の北辺の実地

踏査の費用とし、間宮海峡の発見や、蝦夷・樺太・東韃靼の探検と地図の作製に励んだ林蔵。

二人は、自分のおかれた環境の中で、目的達成のために、僅かなツテを頼りに幕府要人との繋ぎを得、共に大事業を完遂させたのである。両者には、華艶さはないが、科学を追究する旺盛な精神力(熱意・根気)と、合理的(経済観念・気骨)な生活力があつた。その源泉は、忠敬は、佐原時代に培った商人気質(賢い・手堅い)であり、林蔵は、北方の地の探検や幕府の隠密としての任務の遂行によって培った探検家魂(根気・手堅さ・決断)であろう。

完

(さくま たつお・伊能忠敬研究家)



間宮林蔵の墓 茨城県伊奈町 尊称寺

伊能忠敬がメモしたアイヌ語 佐久間 達夫

伊能忠敬は、蝦夷地測量の際にアイヌの人々の協力を得るためにアイヌ語をメモしておいたようである。

「忠敬先生日記」一の巻末に、次のような言葉が記述されている。

○ 人

・男ニビンニ

嬰兒ニボンチヨ 小児ニヘカツ

五十歳前後ニシクブクロ

二十歳前後ニヲツカイ
老人ニチャチャ

・女ニマツニ

嬰兒ニホンチヨ 十歳前後ニマツニヘカフ 二十歳前後ニメ

ノコボウ 五十歳前後ニルブ子マワ 老女ニパッコ

・髭ニレツキ 手ニテテ 足ニケマ 指ニアシケベ

善ニピリカ 悪ニウエン

○ 数詞

一ニシ子ツブ 二ニトツフ 三ニレツフ 四ニイ子ツフ

五ニアシキ 六ニイロン 七ニアルワン 八ニトベシ

九ニシ子ベシ 十ニワ子

○ 食料品

酒ニイルシユ 清酒ニカモイツケンベ 濁酒ニトノト

茶ニテロタイ 汁ニヲハラ 飲食ニアマイベルシ

○ 日用品など

水ニワツカ 油ニシユム 薪ニアベニ 炭ニバシナ

炭火ニウスツ 灯心ニラツチャリカ(シユ子ワカ)

行灯ニラツチャリ 火ニアベ 灰ニウナ 砂ニヲタ

付木ニイワウシタチ 梔ニイタンキ 膳ニイタ

○

茶碗ニシユマイタンキ 舟ニツボン(チボ) 湯ニウセ

熱湯ニセリツクヤ 温湯ニセウニン(トアルヤ)

山川など 山川ニノボレ 川ニベツ(大ニポロ 小ニボン)

沼ニトウ 海ニアトイ 岬ニシレト子 浪ニコイ

○ 会話など

足洗ウ 依つて 湯持ち来たれ

ニケマフライ クシユウセコ コロアリキ

先へ行けニホンキノヲマン 待つてニホシケ

跡から来いニヨスノアリキ 急げニホクレ

立つて行けニアフカシテヤアヲマン

近い ニハンゲ 遠いニトイマ 休みニシニ

至つて上手ニシノアシカイ 捨てるニウキリ

投げる ニヲツワエ

浜辺へ 行つて よいか

ニビシベカノ ヲマンツキ ピリカヤ

山辺へ 行つて よいか

ニキンベカノ ヲマンツキ ピリカヤ

今日 浜辺へ 行くな 潮 よいか

ニタンド ヒシベカ ヲマンツキ シラリ ピリカヤ

潮よい ニシラリ ハワヒリカワ

潮 立ち 不能ニシラリ ヘベシユハ ウエヌハ

潮満 ニシテリベツ 此所 何処ニタンコタン 子コナレヤ

これはニタンベ あのニ子ヤ

遥か 遠く 見える 岬 如何

ニルイノ トイマノ ヌカル シレト 子コナレヤ

島原街道を行くー伊能忠敬追っかけ記

松尾 卓次

このところあちこち歩いて、(島原地方の方言で歩き回ることを)いう。島原の町歩きから始まって、島原藩主の参勤の道・島原街道を歩いてみた。さらに殿様を追っかけて長崎街道(長崎・小倉間)も歩き終えたし、やがては江戸・東京までも歩いてみたいと思っている。

こうして歩き回って書いたのが『島原街道を行く』である。

島原街道ーそれは島原半島をぐるり一周する約110キロの道である。この道は「往還」と呼ばれ、「殿様道」ともいわれた。つまり藩主の参勤や領内巡視の道であって、島原地方のメインストリートであった。実際にこの道を歩いて、見、聞きたことを書いたのが本書で、島原地方の歴史物語である。

島原街道は、島原城大手御門前を出発して島原城下町を北上し、三会、多比良、山田などの村を通って愛津村原口番所までの北目道。南に下って、深江、有馬、口之津、小浜などの村を通って、愛津村原口番所までの南目・西目道。この両道で領内一城下町・三十三村が結ばれていた。今日でもこの道はほぼ残り、たどれば島原半島を一周できる。

この道を藩主が往来しただけでなく、多くの旅人が利用した。坂本龍馬は長崎への道を急いだし、吉田松陰は原城跡に立って歴史を思考している。伊能忠敬は領内を測量して一周した。十一月の寒中であつ

たのか、歯痛に苦しんでいたと島原出しの手紙に書いている。

このように島原街道は歴史の道である。

私も旅人になってこの道をたどった。そしてそれぞれの土地の歴史と風土を訪ね、いろんな出会いがあった。まだあちこちに豊かな自然と人情が残っている。のんびりと歩いていると、身も心も洗われる思いがする。

島原街道は温かい道である。

ということで、拙著『島原街道を行く』の紹介を終わろう。

この街道歩きでいつも出会うのが伊能忠敬さん！(仮想世界でのこと)その追っかけ記を書く。

伊能忠敬一行が来島したのが、文化九年(1812)の冬である。十一月四日に入国し、その日は愛津村庄屋深浦九郎左衛門宅に止宿。深浦家は今も続いているから、建物こそ変わったが、その庭はそのままだ。雲仙岳を借景としたその風景を伊能忠敬と同じように目にすることができると。

翌日から領内の測量が始まった。「烈風の中を先手は六つ頃出た」と日記にあるが、相当寒風が厳しかったろう。同じ頃島原入りしていた野田泉水院は石炭で暖を取ったと旅日記に書いている。

「(十一月十九日)晴天、大西風。今日も(島原への)渡海なし。：折節寒中少々雪あり、：薪木は、：石炭を焚きあたらせる。硫黄の臭きこと頭痛に及ぶ」(日本九峰修行日記)

島原止宿は別当・中村孫右衛門宅。島原城下町のど真ん中にある。屋敷は大型店舗に変わったが、屋敷門は移されて今も残る。四日間この門を入り出したのかと、その思いにふけることが出来る場である。



島原城下町別当 中村孫右衛門屋敷門
伊能忠敬測量時の本陣

ここから妙薫へ出した手紙には、
「年が明ければ六十七歳になり、元気に候得共、齒は一切になり時々痛み、奈良漬けも食べ兼ね、豆腐とカブラ、ひし干などがよい」とあり、弱音が出ている。

一行は島原市中をくまなく測量している。島原測量は、島原大變の二十年後のことであつた。島原大變というものは、背後にある眉山が大崩壊して城下町を埋め尽くし、大津波が沿岸を洗って一万五千人もの犠牲者を出した日本災害史上でも一、二にあげられる大惨事であつた。

た。流れ山によつて多くの島々が生まれたが、その島を一つ一つ測つて回っている。その数三十九。

しかしそのころは復旧して、「湊は新たに人家が出来たものである」と日記ある。町の南部には島原湊もできて、昔の賑わいを取り戻していた。一方、眉山の崩落跡を通つた時、「寛政四癸子年大變後の荒地の界筋である。道より左は小松が生焼けで石原、有は障りなく平らな畑が一面である」との記述もある。

できあがつた伊能図では、三筋の流れ跡が描かれている。二百年後に起こつた平成の雲仙岳噴火災害でも、これと同じところを土石流が走り、大きな被害をもたらした。伊能測量の成果が、残念なことに忘れられていたのである。

現在でも市中測量の跡をそのままとることが出来る。2000年の「伊能ウオーク」島原通過の時には、「島原ちびっ子伊能測量隊」を組織して、その地を歩かせ、梵天を立てて一部を測量させた。

島原のつぎは布津村止宿。そこで名松を見ている。

「高さ四尺余、横九間、長さ十一間と枝葉が八方に延び、階級百二十五六に分かれる。年度六十七八年に及ぶという」と述べる。残念ながらこの松は伝わっていないが、全国を見ている伊能が賞賛するほどの松であつて、百坪に枝葉を広がらせていた。

南有馬村では原城跡に立っている。測量時に土地の老人治右衛門（八三歳）から詳しい説明を受けた。島原の乱時に三万もの農民が虐殺されたところであるから、熱心に語つたのだろう。「その他委細演説す。事繁しければこれを略す」と、少々へきへきしたのかな。

雲仙へも登り、地獄（噴火口）や温泉場を訪れている。「湯名に地獄名をつける」とあり、今もその名は残っている。

出島文庫 095182512960 長崎市金屋町



こうして十六日に及ぶ島原領内の測量が終わって、隣領佐賀藩諫早へと去る。その後、大村領、平戸領、対馬・五島へと進み、長崎市中などを測量して引き揚げた。

島原領内では庄屋宅を本陣としていた。この庄屋元は現在も続いているところが多く、今でもその地に立つことが出来る。また島原測量時の「下絵」が残されているので、その詳しい測量の跡がわかり、地方史研究に大きく役立っている。

その後、昨年、一昨年と豊後街道(熊本・大分鶴崎間)を歩いたが、これまた伊能忠敬の足跡をたどる旅となった。それはまた後日紹介することもある。

(まつお たくじ・島原城資料館)



九州文化図録選集／第四巻

伊能九州図と平戸街道

松本健一氏がヨミウリウィークリーで絶賛。平戸藩に伊能図がなぜ存在するのか。本書では、その理由とともに伊能忠敬と松浦静山の交流を絵図とともに解説している。

松浦史料博物館所蔵の伊能図は、小図の「九州図」を原寸で地域別に十二分割して掲載。九州中の街道のルートや地名、朱の測線が明解。中国の「西国海路図」は半分弱の大きさで八分割して撰津・淡路から瀬戸内海を経て、筑前・肥前長崎に至る海路を掲載。ほかに大図の「平戸図」「長崎図」など貴重な絵図を掲載。

編者／遠藤 薫…新入会員です。

税込み定価2520円

図書出版のぶ工房

092153116353

この書籍は地図センターの取扱品です。

忠敬談話室だより

口佐原訪問記、大野弥三郎 荻原 哲夫

去る三月一八日は孫・伊能忠誨さんの命日（文政一〇年二月二日・一八二七年三月一八日178年忌）でしたので、佐原市牧野の観福寺の墓所に「御札」参りをしてきました。

「御札」の意味は、佐久間達夫さんの「伊能忠誨日記」連載に出会うことができて、かつ、昨年一二月の日本大学文学部における伊能図展のお手伝いが出来、そのお蔭で私のような天文学史研究者にとって超目玉となつた「星図三軸」の展示に全期間立ち合わせていただくことが出来た、その幸福感からというのが主たる理由でした。でも……

ほんとうの理由は、展示会が終了した、その後立て続けにわが身にもたらされた不思議な因縁に関してです……。別途報告ですね。

実は観福寺は二十数年ぶりで忠敬先生の墓は記憶していましたが、忠誨さんの墓と戒名を掲載した第39号を忘れて来ていました。捜すのに手間取るかなと思いきや、近くにお住まいの会員・本郷靖枝さんが散歩に見えられ、忠誨さんのお墓などを教えていただきました。これはもう忠敬先生のお導きと思わざるを得ませんでした。

本郷さんには六月の佐原旅行での再会を約束して別れて、記念館へ向かいました。ちゃんと入場料を出して入館して、学芸員の紺野浩幸さんが居られたので、忠誨さんのことについて一時間ばかり話し込んでお仕事の邪魔をしてしまいました。

記念館に来られた団体入館者に付いた佐原市のボランティア解説員の説明をしばらく聞いて、「忠敬研究会の会員です。解説しようか？」などと出しやばるようなことはせず、展示をざっとみてから外へ出ました。

そこから佐久間達夫さんに電話を掛けたら、初対面にもかかわらず会っていたけるとのことでした。厚かましくもお宅へ邪魔し、忠誨日記の不明箇所について質問し、マイクロ写真を見せて戴くなど大変お世話になりました。佐久間さんは持っている資料を次から次へと出して見せてくれましたので、ついつい夕方近くまで居座ってしまいました。ほんとうに楽しく充実した佐原訪問となりました。佐久間さんに見送られて帰宅の途についたのです。

会報40号から「二人の弥三郎」

大野弥三郎は二人いて、弥三郎規行が忠敬さんの測器（象限儀など）を作り、江戸に帰った後は、傷んだ象限儀のメンテナンスをし

ていることは、佐久間さんが以前に紹介された「江戸在住日記」に度々出てきます。もう一人の弥三郎規周は規行の息子です。この大野弥三郎規周の写真が、『幕末 写真の時代』小沢健志編著（ちくま学芸文庫）に出ています。そこに1820～1886と生没年があります。そこから、忠敬先生の亡くなった文政元年（1818）には規周は未だ生まれていません。

またこの本には榎本釜次郎（武揚）の写真もあります。つまり、忠敬さんと関係の深い大野弥三郎規行と箱田良助の子供たちが仲良く幕府のオランダ留学生となつてオランダで写真に記録されていたという訳です。この弥三郎規周は洋装していますがいかにも時計職人さんという感じがします。忠敬先生のところに入りしていた弥三郎（規行）もこの弥三郎規周に半纏を羽織らせた感じであつたかと想像しながら測量日記を読んでいます。

（おぎわらてつお・東亜天文学会歴史課長）

口川柳を楽しむ！ 古川市の武川影法師さんは全国郵政川柳人連盟の東北・北海道プロジェクトの選者を務めておられます。

「江戸川柳を勉強しています。大変隠語が多くてむずかしいですが、忠敬さんの生きていた時代の古川柳を書いてみたいと思っています

す。たまにはやわらかい話しも面白いかも」



□伊能忠敬に迫る現代の歩測名人

NTV「おもいつきテレビ」に会報が登場！

5月3

日のこと
ですが昼
の情報番
組で「今
日は何の
日」とい
うコーナ
ーに会報
が登場し
ました。



□広がる大図展！鹿児島から全国へ！

この日に合せた話題は「第一回全日本歩測大会を開催した日」というものでした。五年前武蔵野市で開かれたスリーデーマーチで第一回全日本大会が開催され、大勢の会員のお手伝いを頂きました。その経過は会報で報告されています。正解の説明に会報が紹介されました。十分間の番組ですが各方面に取材するのですね。対馬の知人からさっそく「見ましたよ」と連絡がありました。事前に知らせていなかったのに。電波の威力に感心しました。



五月二日から鹿児島市で大図が公開されました。六月上旬は東京の新宿駅で「伊能図から現代」展。その後佐原市へと続きました。



南アルプス芦安山岳館では来年一月末まで「伊能図と南アルプスの測量・地図展ー山頂への足跡ー〇〇年の時空を超えて」が開催されています。

各地からの開催の要望が多く、日本地図センターでは引き続き各地の開催を支援していく予定です。

大図展

注・予定情報ですので要確認です。

- | | | |
|------|-----|------------|
| 7・16 | 8・5 | 栃木県宇都宮市 |
| 8・2 | 5 | 北海道留萌市 |
| 8・11 | 14 | 岡山県新見市 |
| 8・26 | 28 | 徳島市「徳島そごう」 |
| 9・2 | 4 | 高松市「市民会館」 |
| 11月 | | 高知市 |

11・18～20 静岡市「地図展 05 in 静岡」
11 月 下旬 鳥取市「歴史博物館」
2006年 今治市、旭川市

伊能忠敬大阪測量二百年記念イベント！

主催 私たちのみちとまち in 堺実行委員会

「ウォーキング&シンポジウム」

8 月 27 日（土）堺市浜寺公園

教育テレビで「伊能忠敬」再放送！

・NHK学校放送「測量実験の様子」

9・14 水 午前 11・15～11・30

9・21 水 午前 11・15～11・30

11・1 火 午前 3・05～3・20

・学校デジタルライブラリー

「にんげん日本史」

11・8 火 午前 2・00～2・50

□忠敬史料のネット検索広がる！

開館以来一〇四年の歴史、成田山仏教博物館の蔵書検索システムが完成。館報から

国会図書館も蔵書しない書籍が多数あります。最後の網として活用を呼びかけています。ちなみに伊能文庫の検索では 88 件ありました。戦前の貴重書がかなり入っています。

小原大衛氏旧蔵の測量日記や沿海日記も。

http://

www2.clis.ne.jp/syogai/nrtbutto

国立国会図書館はインターネット上で画像を公開する「貴重書画像データベース」を

拡充し、古地図や城の外観図など「絵図」の公開を始めた。

公開したのは伊能忠敬の「伊能日本実測小図」や江戸初期の日本地図、十七世紀中ごろの大坂城の外観図など五十三点がある。

http://www.ndl.go.jp

□「韓国一周友情ウォーク」ゴールイン

5 月 31 日一行は無事、元気で釜山に到着しました。ウォークの様子は都度ネット報道されましたが、まともは朝日・埼玉版で金井さんから報告された。隊長の西川阿羅漢さんは旅の途上で「瑞宝双光章」の受賞の報に。

韓国一周



行く先々人々の温かさ

「韓国一周」の一行は、5月31日、釜山に到着しました。この旅は、西川阿羅漢隊長の率いで、仲間たちと共に、韓国一周を歩きました。旅の途中、多くの温かい人々に出会いました。この温かさは、一行を元気づけ、旅を続けさせる原動力となりました。この旅の思い出は、一生の宝となることでしょう。

続く佐原の生誕記念行事へっぞ

六月の「あやめ祭り」から七月は「佐原の大祭・夏祭り」「水郷さわら花火大会」。秋にはNHK FM番組「ベストオブクラシック」「佐原の大祭・秋祭り」「市民文化祭」など催事が続く。「観光写真コンクール」「町並み建物公開事業」「ふるさとフェスタ佐原」「中心市街地活性化フォーラム」などの大型記念行事が計画されています。是非、佐原へのお越しをお待ちしています。

お知らせ

□新入会員のみなさんです。どうぞよろしく

遠藤 薫さん 福岡市中央区

九州歴史の道研究

「図書出版の工房」編集者

木内 志郎さん 東京都大田区

千葉商船代表取締役

額賀 大康さん 東京都渋谷区

明治神宮総務課長

鵜 博敏さん 埼玉県鴻巣市

中小企業総合事業団OB

宮内 敏さん 銚子市

元高校教師、コンピューター学校講師

山口 惣司さん 千葉県東庄町

詩人

伊能忠敬研究会御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

—予定—

第42号締切9月末 発行11月

②例会・見学会の開催

第43号締切12月末 発行2月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第44号締切3月末 発行5月

④その他付帯する事業

- 三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
- 会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

④ (04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

また、各種情報、近況、話題などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページでは大友さんに永年お世話になりました。秋葉武晃さんに引き継がれています。どうぞよろしく。

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~kokko>

編集後記

佐原でペイレ図公開とシンポジウムから10年。この節目に待望の大図214枚が里帰り、生誕祭は盛大に。次世代の元氣な顔々にはたぶん忠敬さんも笑顔で答えたことでしょう。◇本号は皆様の暖かいご支援により増頁になりました。◇先日日本三景松島を歩きました。忠敬さんは34才の時妻達と観光旅行、「奥州紀行」を記しています。◇塩釜に向う途中、末の松山では「俊成卿女、定家卿、西行法師の和歌」「塩竈明神へ参詣し普請の結構、神社正面に両社有り、右宮左宮と云い、里人は鹿嶋香取の神なるよし」と「八百八嶋の景一眼に相分り、其景色筆墨の及ぶ所にあらず」、瑞岩寺「座敷の結構、金襴、彫もの二伸かたし」◇時代を超えた記録をなぞり、文化系感度を携えて実業の世界から自然界への探究心を育てていたようです。◇鹿児島大図展、武蔵野マーチ、佐原行事からロンドンの英国海事博物館、星槎代表です。テロ事件に遭わず安心。次号で報告が聞けます。◇ハーバード大学図書館の会報注文は継続。◇「ちばらぎ」に広がる偉業 枝葉伸びめげずに育て 忠敬子(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.41 2005



Commemoration Number Congratulations

on 260th Anniversary of Tadataka Inoh's Birth

1. Sawara Survey Maps has Restored
2. From Various Events in Sawara
3. The First Half of Tadataka's Life: Sawara
Town Map and Picture of Sawara
4. Sawara, Tadataka's Home Town
5. Deep Impression Afresh about Sawara

Compuce a Poem about Tadataka(3)

TOPICS

- In Conclusion of Exhibitions of Large-scale Inoh Maps in Musashi
Documents about the Maekawa's Attendance to Tadataka
Japanese Poems -Tanka and Haiku-about Tadataka
Tadataka's Survey Travel on Foot
Report of Travel Tracing Tadataka's Survey Route on a Sunday
Road-Transcend Space and Time
From Daily Yomiuri Brief Review
History about the Name and Seal of Buyodo Company
Walking Travel on The Shimabara Highway

MATERIALS

- Reading Documents "Seimonkinkyoruiroku" (8)
Inoh's Family Documents(5) Ogata Kenjoro's Letters
Mamiya Rinzo's Survey in East Ezo
Tadataka's Unannounced Letter(3) Hakoda Sonoemon's Letter
Tadataka Inoh and Rinzo Mamiya (2)
Ainu, Tadataka Noted Down

MEETING ROOM

- Report from Sawara and Ohno Yasaburo
Information

Editorial Department	1
	2
	3
Sakuma Tatsuo	6
Sakuma Tatsuo	10
Shinzawa Yoshihiro	14
Yamamoto Kimiyuki	18
Inoh Hiroshi	27

Ohtsubo Shuji	20
Watanabe Kenzo	22
Watanabe Kenzo	26
Kakimi Soichi	28
Yamaura Sachiyo	29
Niigata Nippo	30
Daily Yomiuri	45
Kojima Hisatake	58
Matsuo Takuji	67

Kojima Ichijin	32
Ando Yukiko	38
Iguchi Toshio	46
Itoh Eiko	54
Sakuma Tatsuo	59
Sakuma Tatsuo	66
Ogiwara Tetsuo	70
Editorial Department	72

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY